

ドイツ思想詩の黎明 その二

——ハラー『朝の思い』(一七二五年)——

内容梗概

ドイツ思想詩の黎明——ハラー『スイス詩歌の試み』

- (一) 序言 [第36巻] 一(43)頁—四(46)頁
- (二) 『朝の思い』(一七二五年) [第38巻その二]

- 要旨
- | | | |
|--------------------------------|----------|---------|
| (1) 「創造の不可思議」 | 六(216)頁— | 五(215)頁 |
| (2) 「鯨」と「象」 | 七(217)頁— | 七(217)頁 |
| (3) 「不可測の万有」と「神性の大圏」 | 七(217)頁— | 八(218)頁 |
| (4) 「無限宇宙」と「結晶の如き天界」 | 八(218)頁— | 九(219)頁 |
| (5) 「遍き無」と「良く効く無」 | 九(219)頁— | 〇(220)頁 |
| (6) 「途方もない流暢さ」と「或る内なる声」 | 〇(220)頁— | 一(221)頁 |
| (7) 「或いはプロッケス、或いはローエンシュタイン」 | 一(221)頁— | 二(222)頁 |
| (8) 「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓」 | 二(222)頁— | 四(224)頁 |
| (9) 「神」と「虫虻」 | 四(224)頁— | 五(225)頁 |
- 和文註解
 欧文註解 (Quellenachweis)
 Zusammenfassung/Sommaire/Abstract
 Inhalt/Table des matières/Contents
- | | | |
|--|--------|-------|
| | 226)頁— | 231)頁 |
| | 232)頁— | 248)頁 |
| | 249)頁— | 251)頁 |
| | 252)頁— | 254)頁 |

- (三) 『アルベン山脈』(一七二九年)
- (四) 『理性、迷信、不信仰についての考え』(一七二九年)
- (五) 『悪の根源について』(一七三四年)
- (六) 『永遠についての未完詩』(一七三六年)
- (七) 結語

※既刊部(一)は註解および要旨ともに、一九八七年度・高知大学学術研究報告、第三六巻、人文科学篇、四三頁—五四頁にて公刊されている。

高橋 克己

人文学部独文研究室

要旨

一七二五年頃の詩歌で後世シラーが「驚嘆の念を以って引用した」ほどの作品は恐らく若きハラーの『朝の思い』以外に見出し難いであろう。蓋し当時詩壇の大御所プロッケス盛時の成果『神における地上の楽しみ』は続々と公刊されていた。それでは何故に『地上の楽しみ』が新たな時代を担う世代に疎まれてゆくのかを考えてみると、ハラーの言う通り「余りにもプロッケスが途方も無い流暢さに感けて、筆先から韻文を捨り出した」からである。即ちシラーが時流の寵児ヴォルテールの「才氣に富む頭」に「心情の貧困のみ」を見出しただ様に、『地上の楽しみ』に敢て「魂の歌声」を聴き取るのは啓蒙と革命の時代の精神には望み得ないことであった。

他方『朝の思い』には「百合の竜涎香の薫り」とか「繊細な玉葉の縹子灰色」など所謂十七世紀バロック後期の「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓」が第一部に認められるのであるが、しかしながら第二部に至ると、シラーをも動かした「或る内なる声」が響き渡り、「波濤を潮吹き、尾端で猛く進む鯨」と、「大地より塔の如く聳え立つ象」が物語られ、就く後者の「その骨の山に魂を吹き込んだ」と歌われる「創造の不可思議」を示す詩歌象徴にて最高潮となる。即ち骨肉と靈魂との明暗が此所では見事に織り成され、この物と心との両面の緊張により独自の悲壮美が形造られているからである。

更に詩想は果し無き「不可測の万有」を話題として「無限宇宙」へと開かれ、古来の天動説が描く「結晶の如き天界」を破り空無へと突き抜ける。他方プロッケスでは「無限の途方なく深い空所」への眼差しも結局は「遍在する神」に抛り「良く効く無」へと丸く収まる。同様に『朝の思い』終結なす第三部でも、その前で「遍き無」への展開の契機を孕んだにも拘わらず、所詮は「虫虻」へと卑下した人間が「神の全能」を讃えるのである。

ハラー『朝の思い』(一七二五年)

(1) 「創造の不可思議」

『シラーの逃亡』におけるシュトライヒャーの叙述によると、十六歳そこらの若き医学生シラーにとり、生理学や解剖学の大家のみならず偉大な詩人でもあったハラーの存在が、いかに大きなものであったかが解かる。

すると安らぎを与える或る内なる声が、シラーに大声で呼びかけた。かの偉大な医者にして偉大なる自然探究者ハラーは、同時にまた偉大なる詩人ではないか？ 創造の不可思議をハラーよりも美しく壮麗に誰が歌ったであろうか？

汝は大地より象を塔の如く聳え立たせ、

その骨の山に魂を吸き込んだのだ。

(『朝の思い』一七二五年、第九節、第三五句―第三六句)

この表現をシラーは、ハラーの別の詩句とともに、当時(一七七五年頃)のみならず、青春時代初期が疾うに過ぎ去って後も、なお驚嘆の念を以て引用したものである。

此所に引用された詩句は、ハラーの代表作、例えば『悪の根源について』(一七三四年)とか『永遠についての未完詩』(一七三六年)からではない。興味深いことに、これは何と僅か十七才にも満たぬ一七二五年春、詩人自身の記した日付によると「一七二五年三月二十一日」に、しかも一気呵成に出来上った『朝の思い』からである。

ハラー自身この詩については、十三年後の自作詩集『スイス詩歌の試み』第四版(一七四八年)以降、左記の断り書きを附している。

この詩の小品は、私が残しておくにお幾らか価値ありと認めた諸作品のうち、最も古いものである。これは、ほんの一時のうちに成った。従って不

完全なために、これを保存しておくのを私は多少ためらったのである。故に識者は、更に著者の未熟な(当時の)年齢を考え併せて、この作品に手厳しいことは申されぬであらう。

(『朝の思い』への断り書き)

一応は不満を抱きながらも、ハラーは当詩歌を刊行し続けた。始め『スイス詩歌の試み』初版(一七三二年)と再版(一七三四年)では、巻頭が出色の『アルペン山脈』(一七二九年)で飾られて、『朝の思い』は四番目(初版)や二番目(再版)に位置していた。ところが、詩人ハラーの名声確立後の第三版(一七四三年)以降は、『スイス詩歌の試み』の巻頭に『朝の思い』が来る。すなわち、もはや瞳目すべき代表作で初頭から衆目を牽かずとも、読者はハラーの作品を未熟なものからでも受容する素地を得ていたのである。

確かに詩人自身が「不完全(unvollkommen)」とか「未熟(unreife)」(註(5))を話題としていることから解かるとおり、一七三〇年前後の力作の類と比べるならば、『朝の思い』が見劣りすることは否めない。だが『アルペン山脈』や『悪の根源について』が当時としては群を抜いた破格の作品である点を忘れてはならない。むしろ瞳目すべきは、後世の大家シラーが前述の如く、就く『朝の思い』の一節を「驚嘆の念(Bewunderung)」を以って引用した(註(2))ことの方である。果して他に一七二〇年代の詩歌類で、啓蒙と革命の時代を担う世代により、この様な格別の扱いを受けた作品が外の何処に見い出されるであらうか。

当一七二〇年代に頭角を現わして詩壇に君臨していたのは、ハムブルグの教養人プロッケス(一六八〇年―一七四七年)で、この詩人の作品集『神における地上の楽しみ』の第一部は、一七二一年に初版、一七二四年に再版、一七二六年に第三版、一七二八年に第四版、一七三二年に第五版と刊行され続ける。更にその第二部(初版一七二七年)および第三部(初版一七二八年)も各々再版が、同

一七三〇年に出版の運びとなる。当プロロケス盛時に、目立たずアルペ
ン山麓ベルン市に、今なら中等教育をうける年頃の青年ハラアが、四十
歳を越えた当世一流の文人と競おうとする。創作技法の熟達とか人生経
験の多彩を此所で取り上げて、畢竟シラーの歌心を揺さぶり続けた
「内なる声 (innere Stimme)」(註(2))を静聴することにはならない。
蓋しこの「途な」魂の歌声 (Seelengesang) とも言える純粹な調べを、
若きシラーがプロロケスの『地上の楽しみ』でなく、ハラアの『朝の思
』に聞き取ったことが興味深いのである。

(2) 「鯨」と「象」

まず此所では、シラーの脳裡に焼き付いた詩節 (註(1)) に注目し
てみたい。それは各節四句ごとで全十二節 (全四十八句) の『朝の思い』
の中央部 (第六節—第一〇節) 後半に位置している。

Dem Fisch der Ströme bläht / und mit dem Schwanze stürmet

Hast Du die Adern ausgehöhlt;

三五 Du hast den Elefant aus Erden aufgeführt /

Und seinen Knochen-Berg besetzt.

波濤を潮吹き、尾鰭で猛く進む鯨に

(創造主たる) 汝は血脈を穿ち、

三五 汝は大地より象を塔の如く聳え立たせ、

その骨の山に魂を吹き込んだのだ。

(『朝の思い』初稿、第九節)

話題の「鯨」(第三三句)と「象」(第三五句)の両者は、若きシラーも
親しんだシャフツベリ著『道德家』(一七〇九年)第三部の第一章で、
既に話題とされた巨獣類であるが、目下ここで肝要なのは瞠目すべき形
象の内容ではなくて、むしろ後世シラーが正に「驚嘆の念を以て引用
した」(註(2))ほどの詩人ハラアの歌い振りと考えられる。

二二七 ドイツ思想詩の黎明 その二——ハラア『朝の思い』(一七二五年)——

なぜ格別に『朝の思い』第九節(第三三句—第三六句)が心に刻み込
まれるのであろうか? それは恐らく「鯨」と「血脈」、さらに「象」
と「魂」の結びつきにあるのではなからうか。殊に「象」は、「大地よ
り塔の如く聳え立つ」「骨の山 (Knochen-Berg)」と歌われた後に、「魂
を吹き込まれ」と規定される。つまり骨肉と靈魂と、物と心との明
暗が見事に織り成されていると言える。この様に相反する両要素が対立
を孕みながらも均衡を保つ所に、一種の悲壮美 (Pathos) が醸し出され
ることになる。

正にシラーこそその悲壮美を抒情表現にも、悲劇創作におけると同様
に生涯求め続けた詩人であった。翻って考えてみるに、この礎はハラア
の場合もシラーの場合も医学研究と結びつけることが出来る。すなわち
生理学などで体と心との係わりを、更に自然と精神の相互作用として眺
める眼が、いつしか詩歌象徴の衣をまとう「骨の山」と「魂」に辿り着
くと思われるからである。他方「鯨」(第三三句)ほど巨怪な肉の塊は
ない。但しこの肉塊に幾重にも「血脈」(第三四句)が走り通い、物質
ならぬ生物と看做される。つまり巨怪な肉塊が生息している靈妙さに、
肉と魂との不可思議な結び付きが驚嘆されるのである。

(3) 「不可測の万有」と「神性の大國」

前述の印象深く「鯨」と「象」が歌われた第九節で「創造の不可思議」
(註(2))が浮き彫りにされた後に、引き続き第一〇節においては天地
創造により成る宇宙(カオス)が話題となる。

広大な天空の碧玉なす蒼穹は、

(創造主たる) 汝の御手の容易き業。

この不可測の万有 (Das ungemessne All) は、唯され自体により限界づ
けられ、

(高橋)

四〇 汝には「我欲す(〜よ在れ)」の「言」(das Wort)のみで事足りるのだ。

(『朝の思い』初稿、第一〇節)

後に当詩節は次の様に変更される。

広大な天空の碧玉なす蒼穹は、
空 (Ieer) 所を礎に築かれ、

この神性の大國 (Der Gottheit grobe Stadt) は、唯それ自体により飾られ、

四〇 無 (Nichts) から他ならぬ汝の「言」(dein einzig Wort) が高めたのだ。
(『朝の思い』改稿、第一〇節)

『旧約聖書』の「創世記」冒頭の「天地創造」を念頭に置いた「無からの創造」(Creatio ex Nihilo) が、両稿ともに詩想の中心をなしており、しかも宇宙像の有様は所謂プロトレマイオス風に有限な閉じた系を前提としているように思われる。

まず初稿では、宇宙が「それ自体により限界づけられ」た被造物と看做され、たとえ人知には「不可測」でも、悠久無限と考えられていない。なぜなら無限の宇宙空間に「限界」はないからである。蓋し「不可測 (ungemeine)」とは気になる言葉で、場合により当語は「果し無き」つまり「無限」を指す。例えばハラーの別の詩『永遠についての未完詩』では、「(死後も続く) 厳肅な永遠の空怖ろしき海原 (Forchtbares Meer der ersten Ewigkeit)」(第二一句) を踏まえて、「神 (Gott)」(第七五句) が「果し無き時の規矩」(das Maab der ungemehnen Zeit)」(第七六句) つまり「永遠」の「規矩」と言われぬ。

もし「不可測の時 (die ungemehne Zeit)」が「永遠 (Ewigkeit)」ならば、『朝の思い』初稿(註(12)) 第一〇節にある「不可測の万有 (Das ungemehne All)」(第三九句) は、無限の宇宙空間と解されるで

あろう。すると引き続き詩句「唯それ自体により限界づけられ (begrenzt nur durch selber)」(第三九句後半) と矛盾せざるを得なくなる。そこで後年ハラーは、恐らくこの矛盾を回避するために、当詩句を「この神性の大國は、唯それ自体により飾られ」(註(13)) と改めたのであろう。古来アリストテレスなどに見られる所謂プロトレマイオス風の「宇宙 (Kosmos)」は、野を飾る、菊科の花の名前ともなっていることから解かるように、「秩序」とか「世界」と共に「裝飾」をも意味する。改稿後の『朝の思い』第三九句は正にこの筋の「世界秩序」を物語らんとしている。

(4) 「無限宇宙」と「結晶の如き天界」

焚刑にて受難した思想家ブルーノを弾劾するのに、ルネサンス当時カトリック教会権力が異端視した重要文献が、この殉教者の著書『無限、宇宙および諸世界について (De infinito, universo, et mundi)』(一五八四年) であり、此所に述べられた「無限宇宙」の世界観により、それまで法外な権威として仰がれたプロトレマイオス風アリストテレスの天動説は微塵に碎かれ互解することになる。目下話題のハラー初期の詩歌『朝の思い』第一〇節の第三九句に関して、改稿の「神性の大國」よりも初稿の「不可測の万有」の方が優れるのは、この世界観の革命の余波を伝えるからである。

通例この革命は所謂「コペルニクスの転回」と命名されるのであるが、この天文学者の著書『天体の回転について (De revolutionibus orbium coelestium)』(一五四三年) に言つ「天体」は、あくまで著書表題の文字通り「円 (orbis)」を意味し、コペルニクスの業績は単に「天体」の中心点を「地球」から「太陽」に移し変えた点にあるに過ぎず、所詮「丸く収まった世界秩序」たる「神性の大國」(註(13)) は崩壊していない。そして就くブルーノの説く「無限」が、此所には未だ孕まれてい

ないのであるから、ハラーの言う「不可測の万有 (Das ungemessene All)」(註(12))から期待される「無限宇宙」は望み得ないのである。しかしながら「天体の回転」における「天動説」から「地動説」への所謂コペルニクスの転回の衝撃は甚大であった。何とコペルニクスの話題の書が、ローマ教皇庁の禁書目録から外されたのは、西暦一七五七年である。

プトレマイオス説は虚偽であった。それに根拠がないことを誰も疑わない。… 竟に夜明けが来て、結晶の如き天界、世界の中心を占める地球の高慢な地位、太陽や恒星郡の無用の速度、それに当学説の別の誤謬が色々と、真理から隔てられたのだ。²⁸⁾

一七六二年ビュフォン『博物誌』独訳への「序言」で、ハラー自身がこう語っている。興味深いのは此所で「誤謬 (Fehler)」として「結晶の如き天界 (der kristallene Himmel)」が挙げられ、宇宙がもはや閉じた「世界秩序」と解されず、コペルニクスの転回がブルーノ風の「無限」へと開かれていた点である。

思いがけずも詩人ハラーの語気は、「神性の大国」を「果し無き万有」へと開いてしまった。恐らく若き当時一七三五年の段階では不如意と思われたからであろう。後年ハラーは、これを昔日の天動説による了解に近づけてしまう。かと言ってハラー自身が新たな世界観あるいは宇宙像に背を向けたわけではない。このことは右記の「序言」(註(21))のみならず、何より前述(註(15)―(16))の『永遠についての未完詩』(一七三六年)が雄弁に物語ることになり、その第三七句で「無限 (Unendlichkeit)」が、更に第八二句では「遍き無 (Nichts)」(註(25))までが歌われるのである。

(5) 「遍き無」と「良く効く無」

未だ『朝の思い』には、敢て空、無を観する詩想がない。改稿後の「空」

とか「無」(註(13))とて、「天地創造」のための消極条件に過ぎない。むしろ「結晶の如き天界」(註(21))が「唯それ自体により限界づけられ」(註(12))でいる姿を想い浮かべるのが適切であろう。この点ハラーの詩想は当時一七二〇年代中頃のプロッケスのものと比べると遅れた感じを抱かせる。例えば後者の詩集『神における地上の楽しみ』(註(7))第一部(初版一七二一年/再版一七二四年/第三版一七二六年)の巻頭を飾る『天空 (Das Firmament)』は、²⁹⁾ 齢四十を過ぎた円熟した筆致で以て、「碧玉なす深淵 (die Saphirne Tiefe)」(第一句)から歌い始めて、「無限の途方なく深い空所 (die unendliche, unmaßig-tiefe Hölle)」(第七句)を「永遠なる諸世界の心像 (ein Bild der Ewigkeiten)」(第八句)と纏みつつ、³⁰⁾ 竟に「わが全存在 (Mein ganzes Wesen) は塵となり、点となり、一つの無 (ein Nichts) となった」(第十六句)と認めている。

そして私は自分自身を喪失し、このことが私を突然打ちのめした。

一八 絶望が、完全に動揺したわが胸を齧した。

然れども、お良く効く無 (heilams Nichts) よ！ 幸運な喪失よ！

二〇 遍在する神よ、汝において私は自己を再び見出したのだ。³¹⁾

(『天空』第一七句―第二〇句)

仮に第十八句でプロッケスが筆を絶ったのならば、『地上の楽しみ』に特有の屈託なきで興を殺がれることはないであろう。そして望むらくは、後世ハラーの詩句が『永遠についての未完詩』から、プロッケスの「絶望 (Verzweiflung)」(『天空』第十八句)へと見事に協和し得ると思われる。

八〇 そうだ。万がいち汝(神)の堅固な諸力が沈み得るならば、

やがて深淵の口が開き、

遍き無 (Ein allgemeines Nichts) が、存在の国全体を(呑み)、

時をも永遠をも同時に(呑む)であろう。

あたかも大海原が一滴の水を呑む如く⁽⁸⁵⁾

〔『永遠についての未完詩』一七三六年、第八〇句―第八四句〕

厳肅な「過ぎ無」とは裏腹に、プロッケスの『天空』は「良く効く無 (heilsams Nichts)」を落として、「遍在する神 (Allgegenwärtiger Gott)」(註(24))で楽天の大団円を迎えることになる。これに対しハラーの「永遠についての未完詩」では、詩想が空無へと開かれ、昔日に「無限」の説ゆえ殉教したブルーノの姿に恥じることなく、思索する歌心は何時しかパスカルの『省察』の言葉を想い起こさせるのである。

Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.

この無限の空間の永遠の沈黙は、私に恐怖をひきおこす。⁽⁸⁶⁾

(6) 「途方も無い流暢さ」と「或る内なる声」

右に引用した『省察 (Penses)』の著者パスカル(一六三三年―一六二一年)の活躍した時期十七世紀を、通例ドイツ文学ではバロック期と呼び啓蒙期十八世紀と区別する。そして普通プロッケス風の先に見た楽天大団円の落(註(24))こそ、新たな光の時代の啓蒙思潮を特色づける指標と考えられる。例えば時流の啓蒙家ヴォルテールは『哲学書簡』(一七三四年)であけすけにこう告白する。

私はといえは、パリやロンドンをこう見渡して、パスカル氏のいうあの絶望 (désespoir) とやらに陥る理由は何一つ見当らぬ。⁽⁸⁷⁾

此所には同じ頃プロッケスが『天空』第十八句で歌い上げた「絶望」の入る余地がない。更にその第二〇句に来る「遍在する神 (Gott)」(註(24))も、ヴォルテールによれば、「もし神が存在しないなら発明せねばならぬぞ (Si Dieu n'existait pas, il faudrait l'inventer)」⁽⁸⁸⁾と云う程度のものである。

かく明快に割り切った啓蒙期を、詩人ハラーは無味乾燥な散文の時代と見ていたようで、昔日を振り返った回想にはこうある。

私達 (ハラーとハーゲドレン) 二人が生まれたのは、詩歌 (Dichtkunst) がドイツから消え失せてしまった時代であった。すなわちプロッケスとピーチュは幾層か、前者は時折壮大な佳作を物した。だが余りにもプロッケスは途方も無い流暢さ (unendliche Fertigkeit) に感服して、筆先から韻文 (Reime) を捻り出した。…⁽⁸⁹⁾

一七七二年三月ゲミンゲン宛書簡でハラーがこのように語る「詩歌」の精髓なす歌心は、プロッケスの『地上の楽しみ』とかヴォルテールの『哲学書簡』に見受けられる「途方も無い流暢さ」(註(29))とは全く別の所にあったと考えられる。

ならば単なる「韻文」ならぬ「詩歌」(註(29))が何処に存するかと言えば、それは既に啓蒙と革命の時代を担う世代との関連で触れたように、後世シラーをも「驚嘆の念」で満たした「或る内なる声」(eine innere Stimme) (註(2))に他ならない。

もし君らに感情が無いなら、それは会得できないだろう。
一八一二 もし魂から (aus der Seele) こみ上げ、
根源の力に溢れる快音⁽⁹⁰⁾

どの聞き手の心情にも迫らなくては。⁽⁹¹⁾

(ゲーテ『ファウスト』初稿、一七三三年―一七三五年)

詰る所プロッケスやヴォルテールの「韻文」は、心ではなく頭で、精髓⁽⁹²⁾ではなく才気で捏ね上げたものと、後世ゲーテたちには映じたと思われ。例えば『素朴文学と情感文学について』(一七九五年―一七九六年)においてシラーがヴォルテールの「才気に豊む頭 (witziger Kopf)」を話題として此所に「心情の貧困のみ (nur die Armuth des Herzens)」

を目撃し、「私達が出会うのは常にヴォルテールの分別悟性 (Verstand) のみであり、その感情 (Gefühl) ではない」と論ずる段がこれである。ハラールはこの脈絡に「詩歌が消え失せてしまった時代」(註(29))を既に見ており、自らは決然と時流の啓蒙思潮に反旗を翻し、敢てヘルダーリンの詩語で「魂の歌声」(註(9))と言われる新たな詩魂を目指し創作を始めたのであった。

(7) 「或いはブロッケス、或いはローエンシュタイン…」

未だハラールの前にはシラーもヘルダーリンもいない。むしろ新たな「魂の歌声」はこれから始まろうとしている。やがて十八世紀中葉に雄飛するクロプシュトックの歌声がこれを聴き取り称揚することになるであらう。

Hallers Doris, sie sang, selber des Liedes werth,

二三 Hirtzels Daphne, den Kleist zärtlich wie Gleimen liebt,

Und wir Jünglinge sangen,

Und empfanden, wie Hagedorn.

ハラールの『ドーリス』これを歌いしは、自身この歌に相応しき

二三 ヒルツェル夫人ダフネー。この夫をクライストは心から、グライム同様の

親友としている。

して私達若者は歌い、

かつ感受した、ハーゲドルンの如く。⁽³²⁾

(『チューリヒ湖』一七五〇年)

ここで自作の『救世主』(一七四八年以降)をも加え、ハラールの歌曲『ドーリス』(一七三〇年)やハーゲドルン(註(29))の諸詩篇を、クロプシュトックは医師ヒルツェルたちと朗唱する。この医師の親友たちグライムやクライストも新たな時代の詩人であり、既に壮麗なクライストの佳作『春 (Der Frühling)』初版も一七四九年に公刊されている。

二三一 ドイツ思想詩の黎明 その二——ハラール『朝の思い』(一七二五年)——

興味深いことに後にシラーが右記(註(32))詩論において、「理念イデアによりわれわれを感動させる」⁽³³⁾「情感詩人」として挙げた三巨頭「ハラール、クライスト、クロプシュトック」が『チューリヒ湖』第六節(註(33))を機に集い、夙にブロッケス以前の詩人たちは忘れ去られている。

若きハラールが『朝の思い』執筆の一七二五年に、この様な輝かしい將來を既に予見していたとは考え難い。むしろ詩壇の大御所ブロッケスが若者の眼の前に控え、たとえ「途方も無い流暢さに感服して」いたにせよ、「時折壮大な佳作を物し」(註(29))て創作の範となっていたことは疑い得ないことである。

私達二人(ハラールとハーゲドルン)は早くから詩作に勤しんだ。そして十五歳になる前に、私はあらゆる種類の詩句 (Verse) を途方もなく (eine Unendlichkeit) 書いた。或いはブロッケス、或いはローエンシュタイン、或いは別に低地ザクセンの詩人たちを私は模倣した。…⁽³⁴⁾

前述一七二二年三月ゲミンゲン宛書簡でハラールは、この様に「或いはブロッケス、或いはローエンシュタイン…」と語っている。前者ブロッケスが啓蒙期十八世紀前半の文人であることは解かっている。では後者ローエンシュタインとは何者なのであろうか。

この問題を解くに文学史上の知識もさることながら、筆者はまず南大路振一著『一七二〇年代のゴットシェートとスイス派』(一九七四年)に注目してみた。なぜなら当論が「一七二〇年代という、近代ドイツ文学の胎動期——言いかえれば、いわゆる『バロック時代』から『啓蒙主義時代』への移行期に人びとが直面した基本問題」⁽³⁵⁾に触れ、「ホーフマンズヴァルダウやローエンシュタインなど、いわゆる『第二次シュレージエン詩派』の華美・誇張・奇矯・虚飾の趣味」⁽³⁶⁾を、ブロッケスにも関連させて論述しているからである。就く当論には通例の文学研究や詩歌解釈ではまず取り上げられそうにない当時一七二五年頃の「道徳週誌

(高橋)

(moralische Wochenschriften)』(例えは啓蒙家コットシエートの『理性に従い叱責する女性たち (Die vernünftigen Tadlerinnen)』全一〇四篇(一七二五年—二六年)など基本資料が原典のまま例示してある)ので、此所では以下さらに当啓蒙家の論敵ボードマーとフライティンガーの手に成る「十八世紀にドイツ語圏で発行されたほとんど最初の道德週誌」と言われる。『画家談論 (Die Discourse der Mahlern)』(一七二一年—二三年)とか、ボードマー宛ケーニヒの書簡(一七二四年—二六年)も、当邦語文献より引用することにした。

(8) 「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓」

まず此所で翻って話題の詩歌『朝の思ひ』そのものの中から、例の「いわゆる『第二次シュレージエン詩派』の華美・誇張・奇矯・虚飾の趣味」(註(40))に繋がると思われる詩句を取り出してみよう。それは全三部に分かれる『朝の思ひ』の第一部にあたる第一節より第五節にかけて、つまり第一句より第二〇句に至る箇所に見い出される。

五 天は自ら彩る、紫衣 (Purpur) と碧玉 (Saphire) といでい。

暁の曙光は笑い、

その(暁の女神の)額を飾る薔薇色の輝きを前にして

逃げ去るは、夜の蒼白な(星辰の)軍団 (das blasse Heer der Nacht)。

清澄な星辰の舞台 (Sternen-Bühne) の紅色なす暁の門を通り

一〇 近付くは、晴やかな世界の眼 (das verklärte Aug der Welt) (つまり

太陽)

群衆の白馬 (Der Wolken Schimmel) は、煌々く紅玉 (Rubin) の輝き

燃える黄金色 (Gold) が野をこいでい。

薔薇は花開き、朝日に映す、

暁の真珠の露 (Perlen-Thau) や。

一五 百合の竜涎香の薫り (Ambra-Dampf) は、私達の喜びにと生氣を与える。

繊細な玉葉の繻子灰色 (Atlas grau) (註(46))

(『朝の思ひ』初稿、第二節—第四節、第五句—第十六句)

以上の引用に見受けられる「華麗なことばの彩」が、言わば「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓 (Fohensteinische und Hofmannswaldauische Brocken)」と看做され、才気ある啓蒙家コットシエートの考える「当代の趣味からいえば、韻文でもほとんど——ましてや散文では許容さるべくもない」ものなのであった。

蓋し「当代の趣味」とは、所謂「フランス人たちの今日のよき趣味 (der heutige gute Geschmack der Franzosen)」に他ならず、これとの対比で昔日十七世紀バロック期より「これまでに蔓延した悪しき趣味 (der bisher eingerissene verdorbene Geschmack)」が糾弾される。これは更に「悪しき誇張趣味 (der üble schwülstige Geschmack)」と換言され、「ローエンシュタイン、フロッケス、アントール、および彼らの追隨者たちの放恣な言づ回」(ausschweifende Red-Arten)と評される。こうなると興味深いことに、当一七三五年頃の詩壇の大御所フロッケスの『地上の楽しみ』第一部(初版一七二一年)再版(一七二四年)も檜玉に挙げられることになり、この第一部からは讃歌『太陽 (Die Sonne)』第七節を引くのが此所では適切であらう。

更に(太陽よ)汝の光輝は生み形造る、

五〇 色彩、曙、そしつ露や。

描き、紫色化 (bepurpert) へ、黄金化 (vergoldet) へ、

(夜闇に)混じった銀灰色 (Silber-Gräu) や。

しつ天は薄絹の面紗 (Schleier) の如く、

薔薇 (Rosen) や黄金 (Gold) や炎から成り、

五五 大氣の碧玉 (Saphir) に区切られ

不可思議に麗しき御業なす。(83)

『太陽』第四九句—第五六句)

『朝の思い』第二節以下(註(46))と同様に『太陽』第七節でも擬人化および宝石などの色彩による装飾により、「自然」の森羅万象が描かれているのが特色である。

やがて啓蒙期も盛時へと近付くと、この様なプロックエスの表現が一層と厳しく批判され例えは『比喩の本性、意図目的および使用についての批判論文』(一七四〇年)においてフライテインガーにより、「豊満過多の装飾 (die überflüssige Auszierung)」、これにより自然本性の真正な規矩 (das wahre Maß der Natur) が等閑視される」と評される。この観点は当スイス派の盟友ボードマーが既に『ドイツ詩歌の性格 (Character Der Deutschen Gedichte)』(一七三四年)第三四九句以下で、第二次シュレーゼン詩派ホーフマンズヴァルダウに関し次のように述べた内容に相当するものである。

ヴァルダウは想念を比喩 (Gleichnis) と文飾 (Figur) に包み、

三五〇 あたかも牢獄へと押し込め、私達に自然本性を隠蔽し (verbirgt uns die Natur),
そこへ明瞭を (Deutlichkeit) を避け、...

(『ドイツ詩歌の性格』一七三四年)

第二次シュレーゼン詩派やプロックエスに対し、ボードマーとフライテインガーは此所で「華麗なことばの彩」(註(47))を戒めているのであるが、他方ハラーの『朝の思い』が誕生した当時一七二五年には、当スイス派自身が宿敵ゴットシェートの啓蒙批評の思う壺にはまっていた点も見逃すわけにはゆかない。

すなわち『理性に従い叱責する女性たち』(註(42))第一部の第三十四篇(一七二五年八月二十二日付)において啓蒙家は、スイス派の道徳過

誌『画家談論』(一七二一年—二三年)第一部の第一篇(註(44))にある「喜びの国 (Das Reich der Freude)」の描写から、「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓」(註(47))としてこんな所を引用する。

その丘陵群では、諸所で花が首筋 (Hals) をうちらへと伸ばし、... そして (芳香の) 賦香料 (Balsam) や乳香 (Weyhrauch) や没薬 (Myrrhen) の薫り (Gerüche) を私達の鼻口へと吹きこんだ。... 私達の花は手入れされず此所で紅玉 (Rubinen) の如く燃え、かしこではその玉葉を縹子織 (Aalab) や緞子織 (Damast) で飾る。...

此所には、プロックエスの『太陽』第七節(註(50))以上に、ハラーの『朝の思い』第二節以下(註(46))に類似の表現が見られ、プロックエスにも共通な装飾用宝石のみならず、「縹子」の彩色織物とか、様々な「芳香の薫り」までもが「自然を隠蔽し」(註(52))ている。

ところで常に引き合いに出されてきた詩人ローエンシュタイン (一六三五年—一八三年) その人の作品は、果して「豊満過多の装飾」(註(51))で出来た「悪しき誇張趣味」(註(49))に過ぎないのであろうか。一例を引こう。

Ja selbst die zeit wird braut / die blumen-götin schmückt
Ihr selbst das braut-gewand / und ihre kunst-hand stücket

Der Tellus grünen rock mit frischem rosen-schnee
Und wissen hiljen aus.

そうだと時そのものが花嫁となり、花の女神が飾る、
一〇 その花嫁自身の衣装を。して女神の巧みな手は(細かく) 継ぎ合わせる、
大地の緑衣を、瑞々しき薔薇の雪(花びら)と、
して純白な百合でもって。

『ウェヌス』と題されるローエンシュタインの詩歌から取られたこの詩

句(第九句―第二二句)は、今まで例証された「いわゆる『第二次シュレージエン詩派』の華美・誇張・奇矯・虚飾の趣味」(註(40))とは聊か風情を異にしているように思われる。

少くとも『ウェヌス』の引用箇所(第十一句―第十二句)と「朝の思い」(第四節(註(46)))とを比べてみると、同じく「薔薇」と「百合」が歌われているけれども、後者に言う「真珠の露」(第十四句)とか「竜涎の薫り」(第十五句)の方が、前者に見られる「緑衣」(第十一句)とか「雪(花びら)」(第十一句)よりも、言葉が「豊満過多の裝飾」を施されているように見受けられ、むしろローエンシュタインの詩歌象徴の方が「自然」な成りゆきに沿いつつ写り映えていると考えられるのである。

今日バロック詩歌の再評価により、もはや啓蒙家たちの視点でのみ事を片付ける一面性は留保されねばならない。しかしながら新たな詩風を求めたハラーたちにとっては、やはり「軽い泡の如き暗喩の上を泳ぐ」(der auf Metaphoren wie auf leichten Blasen schwimmt)ローエンシュタインの膨らみ浮腫んだ本質(das geblähete und aufgedunsene Wesen dess Lohensteins)、『スイス詩歌の試み』第四版への序言)は乗り越えらるべきものであった。但しその前に「ローエンシュタインが、私の最初の模範(mein erstes Vorbild)であり、わが詩作への激励(meine Aufmunterung zum Dichten)であった」(右「序言」)と告白するハラーの言葉にも傾聴すべきである。つまり啓蒙家が躍進する屈託なき散文の時代にあつては、まず「ローエンシュタインの膨らみ浮腫んだ本質」が詩歌の礎とされ、『朝の思い』第一部に足跡を残したと考えられる。

だが『朝の思い』第二部(中央部)は、前世紀の名残りを忘れさせる程の飛躍を示し、後世シラーの脳裏へと第三五句以下(註(1))が焼き付けられることとなる。ところで当の啓蒙と革命の時代を担う詩人としても、創作の初期には所謂「ローエンシュタインとホーフマンズヴァル

ダウの残滓」(註(47))を垣間見せている。例えばヴァイマル版シラー全集の第一巻の頭を飾る詩歌『夕べ』(Der Abend)(一七七六年)の第三節では、第二六句と第二七句に重ねて「黄金(Gold)」が句頭に、引き続き第二八句と第二九句の句頭にも「黄金化(Vergoldet)」が繰り返され、やがて第三三句は「紅玉の如く」(Wie der Rubin …)と始まる。蓋し、シラーの眼前にはハラーの範があり、既に「黄金」や「紅玉」の文飾(註(46))と共に、「鯨」や「象」の造形(註(10))も控えており、更に壮大な詩魂を喚起する思想詩(Gedankenlyrik)の黎明もあけそめている。やがて『スイス詩歌の試み』初版(一七三二年)や再版(一七三四年)の刊行とともに、十八世紀ドイツ詩歌は内面性豊かな省察と探求にうねる思索の道を決然と歩み始め、通例の教訓詩や自然詩の枠を越えて出てゆくのである。

(9) 「神」と「虫虻」

当論の締め括りは『朝の思い』終結なす第三部(第十一節―第十二節)の考察となり、此所(第四四句―第四八句)で明暗を織り成すのは、「三重に偉大なる神(dreymahl grosser Gott)」(第四一四句)と「一匹の虫虻の誉め言葉(eines Wurmes Lob-Spruch)」(第四八句)である。すなわち上は「神」から、下は「虫虻」にまで至る言わば「存在の巨大な鎖(Vast chain of being)」なす「世界秩序」(註(17))が、厳然と控えていると考えられる。

何たる鎖(Kette)！ 神(Gott)に由来し、いか(に多様)な本性をなし、
天界および地上のもの、天使(Engeln)そして人間(Menschen)より、
獣(Vieh)に至り、
熾天使(Seraphim)より虫虻(Gewirm)に至る……⁽⁸⁾

後にハラーは詩歌『理性、迷信、不信仰についての考え』(一七二九年)

第十七句において、人間存在を「天使と獣との中間存在 (Mittel-Ding)」と捉えるのであるが、この『朝の思い』第四八句で「虫虻 (Wurm)」(註(58))とは「人間」のことである。

「神」を讀めるため、「人間」は「虫虻」へと身を屈める。宗教上の謙虚ゆえ若き篤信家ハラーは、人知の及ぶこと余りに遠く「創造主」との落差を前面に押し出し、『朝の思い』全四八句を閉じる。かくして詩篇は在来の聖歌の一種として丸く収まるのであるけれども、後世ボールドレールの言葉を知る者にはこの結末が何となく齒痒く思われる。

Quand même Dieu n'existerait pas, la religion serait encore sainte
et divine.

縱んば神が存在しなくとも、宗教はなお神聖にして神々しいであろう。(59)

新時代の鋭い逆説はハラーのみならず、プロッケスにもクロプシュトックにも疎い。更に『若きヴェルテルの悩み』(一七七四年)の神観にも疎い。即ちゲーテはこう書いている。

もし僕が草の間の小世界の蠢まきや、小さな虫虻 (Würmchen) や蚊の無数の究め難い姿のあれこれを胸下に感じ、私達を自らの似姿として創造した全能なる神の現在を感じると、… その時に僕はしばしば憧憬の念にかられて思うのだ。(60)

(一七七二年五月一〇日付書簡)

「春の小々な虫虻 (Frühlingswürmchen) へ… 汝が生きている、そして恐らく… 不死ならぬとは… (… nicht unsterblich…)」と『春の祝祭』(一七五九年)で唱ったクロプシュトックの歌声の残響が此所にはある。つまり「存在の巨大な鎖」の最下位に置かれるような「虫虻」にも「全能なる神の現在」は拒まれておらず、森羅万象はハラーが『朝の思い』第二二句で言う如く、「創造主 (Schöpfer)」の「全能の業 (Allmacht Werke)」の証左と見らるべし。

ところが啓蒙と革命の時代には、在来の「神」の「全能」の意味が問い直される。就く『ギリシアの神々』初稿(一七八八年)でシラーは敢然と「神」の「全能」を、古典ギリシアの感性美の鏡へと映し出さんとする。

何であろうか？ 汝の傍で至高の精神、死すべき人の子らの (至高の精神は)？

一九〇 虫虻ども (Würmer) の筆頭に過ぎぬ、所詮は虫虻の王 (Edelster) なのだ。(61)

神々が一層と人間らしかった昔日には、人間が一層と神々しかったのである。(62)

(『ギリシアの神々』初稿、第二四節)

『聖書』により「神の似姿 (Ebenbild der Gottheit)」(註(63))とまで言われる「至高の精神 (der höchste Geist)」も、崇高美の古里ギリシアの「神々 (Götter)」を前に色褪せ「虫虻どもの筆頭 (der Würmer Erster)」へと落ち込む。あたかもゲーテの描いたファウスト博士の如くに。

六五二 神々 (Götter) に私は似ていない！…

六五三 虫虻 (Wurm) に私は似て、塵芥を蠢めく。(64)

(『ファウスト』第一部、一八〇八年)

更に「虫虻」の「神」は『ギリシアの神々』初稿の第十五節で「神聖なる野蛮人 (heiliger Barbar)」(第一一四句)と規定され、古典ギリシアの福音が偉大なる運命の如く轟き、もはやハラーの見知らぬ「至福なるギリシア」への巨歩が踏み出されているのである。

註 解

(1) 「創造の不可思議」

(1) 『朝の思い』全十二節(全四八句)は、初版『スイス詩歌の試み』(一七三二年)二八頁以下を底本として、一応レクラム文庫『十八世紀ドイツ詩集』(一九八七年)五八頁(第一句―第二六句)と五九頁(第二七句―第四八句)に収められているが、諸所今日の正書法に拠り綴り方を改めている。従って当の初版所収の原典を此所では、むしろ専門書『バロック期ドイツ抒情詩』(一九七三年)所収の論文、グートケ『人工楽園での祈り、アルブレヒト・ハラーの「朝の思い」』(三七七頁―三四七頁)の三二九頁(第一句―第二句)と三三〇頁(第二三句―第四八句)に引用された形で取り扱うことにならう。

(2) レクラム文庫『シラーのシュトゥットガルト迷』とマンハイム滞在(一七八二年―八五年)』(一八三〇年頃)一九六八年、一九頁。

詩人たちの中では正にクロプシュトゥックがシラーの心を最も満足させた。それはシラーの心が、宗教の厳肅で崇高な諸対象の下に留まることを、なお依然として最も好んでいたからであった。…

この後に本文に引用したハラーへの言及が来て、「創造の不可思議」が話題となる。

(3) ハラー誕生は一七〇八年十月。詳細はメッツラー研究叢書の第五七巻『ハラー(ジークリスト著)』(一九六七年)五頁参照。

(4) 『スイス詩歌の試み』第三版(一七四三年)に『朝の思い』の成立年月日が「一七二五年三月二十一日」とあり、第五版(一七五一年)より第十版(一七八八年)までは、日付が「一七二五年」とのみ記してあり、決定版の第十一版(一七七七年)には「一七二五年三月二十五日」とある。但し、ベルリン市立図書館所蔵の草稿には当詩歌が「一七二五年三月二十一日」と記されている等々、ヒルツェル編『ハラー詩集』(複製一九一七年)

二八〇頁や、註(1)『人工楽園での祈り』三四四頁で話題とされている。恐らく決定版に拠り、歴史批判版ドイツ国民文学(DNL)第四一巻の第二分冊(一八八五年頃、三修社写真複製一九七四年)所収『ハラー選集』(フライ編)序論一〇頁には、「一七二五年三月二十五日」と記されているけれども、草稿や第三版に見られる「一七二五年三月二十一日」の方が妥当であろう。

なお右一八八二年刊『ハラー詩集』は、アウクスブルク大学に留学中の岸本雅之助教授(岡山商科大学)より複写を御送付いただき参照できた。御厚情に対し此所で謝意を表しておきたい。

(5) 引用の断り書きは、註(1)『人工楽園での祈り』三二九頁に第四版より、註(4)『ハラー詩集』所収『朝の思い』三頁表題下に決定版の第十一版(一七七七年)より引用してある。

なお『スイス詩歌の試み』は、初版が一七三二年、再版が一七三四年、第三版が一七四三年、第四版が一七四八年、第五版が一七四九年、第六版が一七五一年、第七版も一七五一年、第八版が一七五三年、第九版が一七六二年、第十版が一七六八年、ハラー没年一七七七年に決定版が刊行されている。

(6) 詳細は註(3)メッツラー研究叢書『ハラー』三三頁―三四頁を参照。

(7) 『地上の楽しみ』は更に一七三〇年代には、第一部の第六版が一七三七年、第二部の第三版が一七三四年、その第四版が一七三九年、第三部の第三版が一七三六年、第四部の初版が一七三二年、その再版が一七三五年、第五部の初版が一七三六年、第六部の初版が一七三九年とハンブルグで刊行され、別にテュービンゲンで第一部より第六部までが一七三九年に出版されると共に、『選集』(一七三八年)まで編まれる。その後一七四〇年代には、第一部の第七版が一七四四年、第三部の第四版が一七四七年、第四部の第三版が一七四五年、第五部の再版が一七四〇年、第六部の再版も一七四〇年、第七部の初版が一七四三年、その再版が一七四八年、第八部の初版が一七四六年、第九部の初版が一七四八年にハンブルグで、別にテュービンゲンで第七部が一七四六年に公刊される。のみならず一七五〇年には第八部と第九部が、また第一部から第六部までの複刊が一七五三年にテュービンゲンで、かつまた第二部の第五版がハンブルグで一七六七年に刷られている。

(8) 若きハラーは、十五歳そこらでテュービンゲン大学(一七三三年―三五年)、

更に十八歳春までオランダのライデン大学(一七二五年—一七二七年)で学び、当十八歳—一七二七年夏には医学博士として英国に渡っている。

- (9) ヘルダーリン『ドイツの歌』第二〇句。シュトゥットガルト版全集、一九四六年—一七七年(索引一九八五年)、第二巻、二〇二頁。

(2) 「鯨」と「象」

- (10) 『スイス詩歌の試み』初版(註(1))より。

この第九節は改稿後に第三句と第三四句の表現が二ヶ所変わり、「波濤を潮吹き、尾鰭で猛く進む鯨を(Den Fisch) / 汝は血脈で(mit Adern) 穿ち」(註(4))「ハラ」詩集「四頁」と成る。また次の第三五句と第三六句は改訂なしなので、結局は改稿の前後で文意に変更を来すことはなかった。

- (11) シャフツベリ『道徳家』(一七〇九年)第三部の第一章終結部。『性格論』初版(一七二一年)三八四頁 / 再版(一七二四年)三八四頁「海原の巨大な怪物が(vast Sea-Monsters) 浮かぶ氷山を貫き猛進する(pierce thro floating Islands) / 初版三八五頁 / 再版三八五頁「何と敵そかに歩むことか(How gravely move) 陸上で最大の被造物は(the largest of Land-Creatures) の麗し(How) 河川の兩岸を。(on the Banks of this River!)」。
- 英独対訳「標準版」全集(西独シュトゥットガルト版)第二篇の第一巻、一九八七年、三〇〇頁—三〇二頁。

尚この西独版には『道徳家』初版にあたる匿名刊行物『社交的熱狂家』(一七〇四年)もその第二篇の第一巻に収められ、当該の原典一七七頁と一七八頁以下に登場する「海原の巨大な怪物(vast Sea-monsters)」と「陸上で最大の被造物」は、三〇一頁と三〇三頁に見られる。

果して「朝の思い」を執筆した一七二五年にハラが、シャフツベリーの著作に通じていたかどうか? 少くとも一七四五年刊シュバルディング独訳より前に、シャフツベリーをドイツ語で知ることにはなかったであろうし、当一七二五年には仏訳も刊行されておらず、原典を英語で触れる以外道はなかったようである。しかも前述(註(8))の渡英(一七二七年)より前にハラは英語を学んでいない。すると耳学問かも知れない。この脈絡は註(1)『人工楽園での祈り』三四六頁参照。

- (3) 「不可測の万有」と「神性の大國」

- (12) 『スイス詩歌の試み』初版(註(1))より。

- (13) 『ハラ詩集』(註(4))五頁。

「國(Stad)」と訳すのは、「神の國(civitas Dei)」を踏まえてのことである。

- (14) ドイツ聖書協会刊シュトゥットガルト版ヘブライ語聖書、一九六七年 / 七七年 / 八四年、一頁。同協会刊同版ギリシア語七十人訳聖書、一九三五年 / 七九年、第二巻、一頁。同協会刊同版ウルガータ聖書、一九六九年 / 八三年、第一巻、四頁。同協会刊同版ルター訳一五四五年ドイツ語聖書、一九六七年 / 八三年、前篇、一頁。

- (15) 『スイス詩歌の試み』第三版(一七四三年)一四九頁—一五三頁所収『永遠についての未完詩(Urvollkommene Ode über die Ewigkeit)』第三一句。レクラム文庫『詩歌と解釈』第二巻「啓蒙主義と疾風怒濤」(一九八三年)六七頁—七一頁(第三版より原典刊行)所収。

- (16) 『スイス詩歌の試み』第三版(註(15))より。

- (17) ランゲンシャイト社刊メンゲ編ギュートリング『希独大辞典』第二三版、一九七三年、四〇二頁参照。「混沌」が「宇宙」の対極であり、「無限」は「世界秩序」を破るので、古代ギリシア世界観の下で「劣悪」となる。

- (4) 「無限宇宙」と「結晶の如き天界」

- (18) 岩波文庫『無限、宇宙および諸世界について』清水純一訳、一九八二年、訳註二五七頁。

- ブルノーノ自身の校訂になる一五八四年刊本の本文の始まりに De finito, universo, — et mundi とある。…
- (19) 『無限、宇宙および諸世界について』(註(18))一二五頁—一九五八年版原典四三三頁。

したがって天は一つです。それは広大無辺の空間であり、胸であり、宇宙を包むものであり、そこを万物が通過し動いているエーテル界なのです。そこでは数知れぬ星や天体や天球や太陽や地球が、感覚によって見られ、理性によって無限だと推論されるのです。広大無辺で無限の宇宙

は、こうした空間とそこに含まれるたくさんのおももの物体とによって構成されているのです。

(第二対話「冒頭」)

(20) 『無限、宇宙および諸世界について』(註(18)) 二二頁(一九五八年版原典三三五頁)。

かくして、世界を無限とする人々に反対して、世界の中心ないし周辺を想定し、有限者や無限者の中心を地球におこうとするアリストテレスの議論が、空しいものであることが明らかになります。結局、『天体論』の第一巻や『自然学』第三巻に、世界の無限性を否定しようとしてこの哲学者が論じている言葉は、舌足らずで、何の意味もないものなのです。

(『序文書簡』所収「第一対話の所論」)

(21) ハラー『諸著作家と自己自身についての観察日記』全二部(一七八七年)写真複製版二巻本(一九七一年)第二部、一一四頁以下。

(22) 『スイス詩歌の試み』第三版(註(15))より。

(23) 『スイス詩歌の試み』第三版(註(15))より。

(5) 「遍き無」と「良く効く無」

(24) ブロック『選集』(一七三八年)写真複製版一九六五年、四七七頁。『独逸シラー協会年鑑』第十二巻(一九六八年)所収(二二二頁―二六九頁)リヒター著「ブロックスよりクロプシュトックまでの抒情詩におけるコペルニクスの転回」一三九頁以下に解説あり。

(25) 『スイス詩歌の試み』第三版(註(15))より。

(26) パスカル全集(ブレイヤード版)一九五四年、一一三頁(当全集編『省察』九一番)。ブランシュヴェック版『省察』二〇六。

(6) 「途方もない流暢さ」と「或る内なる声」

(27) ガルニエ古典叢書『哲学書簡』一九六四年、書簡二五、一四八頁。岩波文庫『哲学書簡』林達夫訳、一九五一年、二二七頁。

(28) 旺文社『ロワイヤル仏和中辞典』一九八五年、五八〇頁。当の引用句に関してはヴォルテール批判の形で、上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史』第七巻「啓蒙と革命の時代」(講談社一九八一年)第一章「宗教と啓蒙

思想」三六頁にこう論述してある。

晩年のヴォルテールには、理神論者というよりも、むしろ不可知論者、あるいは無神論者でさえあったのではないかと思われるふしがある。…二〇年間にわたって、彼はある一つの神に対する信仰を語ってやまなかった。その神とは、この世界の感嘆すべき機構を作り上げた後、限らない英知によってその被造物である人間たちに自由意志を与え、その使用をこれらの自由に任せて身を隠した偉大なる時計技師なのである。更に後年になって、彼は「もし神が存在しないなら、それを創り出さねばならないだろう」とまで言っているが、ここには既に以前のような確信は失なわれている。この言葉は、不信仰は一部のエリートだけのものにとっておき、人民衆のために宗教をいわば道徳と秩序の守護者として維持していこうという彼の本心をつい洩らしてしまったものだ。

(29) ハラー『観察日記』(註(21)) 第二部、一九九頁。『ハラー選集』(註(4)) 一五六頁のは、諸所今日の正書法に綴りを改めて引用されているので、本編では典拠としない。

(30) ハムブルク版作品集、一九八二年、第三巻、三七二頁(『ファウスト』第五三四頁以下、二五頁)。

心情の奥底から溢れる歌声を唱導する傾向は、十九世紀ロマン主義に於いて疾風怒濤期十八世紀一七七〇年代頃から次第に一般化するものであるが、この傾向は啓蒙と革命の時代において、ドイツのみならずフランスにも見られる新たな思潮である。仏文学では就く革命下一七九四年に断頭台上の露と消えたシェニエ(一七六二年生)の詩篇において、この趨勢が見られる。例えば「新たな想念を礎に古来の韻文を創ろう(Sur des penseurs nouveaux faisons des vers antiques)」(第一八四句。ブレイヤード版全集、二二七頁)と語る「創意(L'Invention)」第三三二句では、「真正な靈感が迫り、燃え立たせ、君臨す者(Celui qu'un vrai démon presse, enflamme, domine)」(全集、一三三頁)が話題となり、また『詩歌雑録(Varia)』の「終結詩篇(Epilogue)」第二句「たおごては、技芸は韻文を作るに過ぎず(L'art ne fait que des vers)」、心情のみが詩人である(Le cœur seul est poète)」(全集、六一四頁)と表明されている。

(31) ソーニエ『十八世紀フランス文学』(一九四八年/改訂第七版一九六三年)

白水社クセージュ改訳、一九六五年、五六頁―五七頁。

詩 叙情詩もまた、ヴォルテールに、不朽の名声を保証するはずだった。古典主義の影響が身にしみついていた彼は、もっとも高級な様式、叙事詩で腕だめしをやった。『アンリヤッド』(一七三三年―一七八年)は、伝統的な主題と手法とを尊重した一〇節の詩で物語る。嵐、戦闘、主人公にかなする物語り、予言的な夢、地球の外への誘惑。これらいつさいが、生彩をかいた、寓意的超自然談。…とともにえがかれている。この着想は斬新だ。… 古典主義文学の主要様式で名声をえたいという同じ意欲が、『真理によせる抒情短詩』や『フォントノワの詩』にもうかがわれるが、二つとも、今日の眼から見れば、出来ばえはいかにもま

ずい。これにくらべると、哲学詩のほうが価値が高い。『社交界の人』(一七三六年)は、物質文明の進歩にたいする才気にみちた弁明である。すなわち警沢は国家的必要性をもっており、これによって、労働と生活の幸福にたいする愛好が確固たるものになるというのだ。七篇からなる『人間論』(一七三八年)は、感情にうったえかけるような主題(『自分の平等』、『自由』、『すべてにおける中庸』)にそって、かなり単純な思想を展開している。

最後に、短詩についていえば、ヴォルテールは風刺詩、あるいは特に、シャトレ夫人のために創作した牧歌のなかで、おしみなく機知をまきちらしている。

大旨ヴォルテールの詩歌作品に対しては、普通このように辛^むい評価が与えられるのであるけれども、且下言及されていない「哲学詩」として此所では『自然法についての詩篇』(一七五六年)を挙げ、啓蒙と革命の時代を担う後世シユニエ(一七二二年―一九四年)がヴォルテールの当詩篇を、右「人間論」と同様^にに壮大な崇高な内容のもの(『matière aussi vaste et aussi sublime』)(註(30)全集、六六九頁)と評し、一応「ヴォルテールが余りにしばしば性急に下絵(essais)を刷り、作品(tableaux)を仕上げなかった」と不満を述べながらも、この詩篇を「不完全な素描(un croquis informe)」として片付けていない点に注目したい。また就^く当詩篇の思想においては、「理性が私達を照らす(La raison nous luit)」(第二部、第一二三句。プレ

ヤード版『雑録』一九六一年、二八〇頁)のみならず、「私達の心情の底に規律と道徳があり(Au fond de nos cœurs la règle et la morale)／＼これが純粋な源泉となつてゐる(C'est une source pure)」(同部、四二句以下。『雑録』二七九頁)と言ふ筋が本論に關係が深い点である。なお当詩篇には形而上の高次元よりルソーが、ヴォルテール宛一七五六年八月十八日の書簡で論述を展開している。詳細は「ルソー書簡全集」(ジュネーブ版)第四卷(一七五六年―一七五七年)一九六七年、三七頁―五〇頁。

(32) ヴァイマル版シラー全集、第二〇卷、一九六二年、四四八頁。

(7) 或いはプロクセス、或いはローエンシュタイン ……」
(33) 一七七一年版クロープシュトック『頌歌集(Oden)』写真複製版一九七一年、一一七頁。

頌歌『チューリヒ湖』の背景は、当一七五〇年七月三〇日の出来事を報じた書簡類に描かれている。その一つはシュミット宛クロープシュトックの一七五〇年八月一日付書簡で、これは一九六二年刊ハンザー版『選集』一〇九頁―一〇九二頁や、一九六六年刊レクラム文庫版『頌歌集』の註解一三六頁―一三七頁に収められ、もう一つのクライスト宛ヒルツェルの一七五〇年八月四日付書簡は、右レクラム文庫版『頌歌集』の註解二三八頁―一四二頁にある。

(34) シラー全集(註(32))第二〇卷、四五二頁。
(35) シラー全集(註(32))第二〇卷、四三六頁。
(36) シラー全集(註(32))第二〇卷、四五二頁。

この種のドイツ詩人の中で私は此所で、ハラ、クライスト、クロープシュトックにのみ言及したい。

(37) ハラー『觀察日記』(註(21))第二部、一一九頁。『ハラ選集』(註(4))一五六頁参照。

(38) 『人文研究』(大阪市立大学文学部)二六の二(一九七四年)初出。後に南大路振一著『十八世紀ドイツ文学論集』(三修社一九八三年)所収(一頁―五五頁)。

(39) 『十八世紀ドイツ文学論集』(註(38))五頁。
(40) 右『十八世紀ドイツ文学論集』一頁。

- (41) 右『十八世紀ドイツ文学論集』三頁、脚註7。
- (42) 右『十八世紀ドイツ文学論集』四頁一五頁、脚註10。
本論文の筆者は、ゲッティンゲン大学付属図書館ならびにミュンヘン在のバイエルン国立図書館蔵の「初版」を複写によって利用することができた。両者は版元が同じではなく、正字法も僅かながら異っている。：本論文での引用は前者によった。
- (43) 右『十八世紀ドイツ文学論集』二五頁。
- (44) 『画家談論』複製一九六九年。この第二部の第一篇は、註(4)ドイツ国民文学(DNL)第四二巻(一八八四年、三修社写真複製一九七四年)一一頁一八頁にも所収。以上右『十八世紀ドイツ文学論集』一四頁の脚註19参照。
- (45) 註(38)『十八世紀ドイツ文学論集』三五頁の脚註56、および三七頁の脚註61参照。一七二四年三月八日付書簡／一七二五年五月二日付書簡／一七二六年六月二日付書簡
- (8) 「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓」
- (46) 『スイス詩歌の試み』初版(註(1))より。
改稿後(註(4)『ハラール詩集』三頁以下)は多少表現に変更があり、例えば第八句「蒼白な」が「青ざめた(bleiche)」と、第一〇句「眼」が「光(Licht)」と、第十一句「群雲の白馬は煌めく」が「灰黄色の群雲(Die falben Wolken)は燃える」と、第十二句「燃える(glühend)」が「燃焼する(brennend)」と、第十四句「暁の早朝(Des frühen Morgens)」が「涼しき朝(Des kühlen Morgens)」と改められてゐる。
話題の第四節(第三句一第六句)は当時一七五四年刊シェーナヒ著『新語辞典(Neologisches Wörterbuch)』(『十八世紀・十九世紀文学記念碑』七〇／八二所収一九八八年一九〇〇年複製)二七頁において、「全きローエンシュタイン風珍語玉石箱(der ganze Lohensteinsche Paritätenskasten)」と評され、その証左として「真珠、薔薇、百合、竜涎香、露、繻子」(二七頁)が挙げられ当四句が引用されている。即ち啓蒙家ゴットシェートの筋にある『新語辞典』の著者は、「五十年前ローエンシュタイン風の名の下に周知であったハラール流(文飾)の渦(der hallerische Wirbel)」(一四七頁)
- (47) 註(38)『十八世紀ドイツ文学論集』三三頁。
引用の典拠はゴットシェートの道德週誌『実直な男(Der Biedermann)』(一七二七年一八二八年刊)二部百篇、バイエルン国立図書館蔵原典複写)第二部の第五六篇(一七二八年五月三十一日)にて、ポードマーとフライティンガーの「想像力の影響と使用について」(一七二七年)が槍玉に挙げられている箇所である。
この他にゴットシェートの主著たる『批判的詩論の試み』(初版一七三〇年)第四版(一七五二年)写真複製版(一九八二年)第一部の第十一章の第五節では、「誇張文体(schwüßige Schreibart)」の模範としてローエンシュタインを挙げ、その具体的な詩節に表現された「銀梅花の冠(Mythenkränze)」[黄金]、「金剛石(Diamant)」[真珠]などを例証とし、当バロック詩人を「ドイツのセネカ(der deutsche Seneca)」(三六九頁)と呼んでゐる。
- (48) 右『十八世紀ドイツ文学論集』三六頁以下。
引用は一七二四年三月二十八日付ポードマーに宛てたケーニヒの書簡より。
- (49) 右『十八世紀ドイツ文学論集』四〇頁以下。
引用は一七二六年六月十五日付ポードマーに宛てたケーニヒの書簡より。
- (50) レクラム文庫「神における地上の楽しみ」選集(一九六六年)五四頁には第一部の第七版(一七四四年)を典拠に『太陽』第七節が掲載されているが、綴りを今日の正書法に従い変更してあるので採用せず、此所では当時の刊本そのままを複写し再刊した一七三八年版『プロクセス選集』(註(24))一八二頁所収の『太陽』第七節を底本とする。
- (51) 写真複製版一九六七年、四三〇頁以下(第一四節「プロクセス詩歌の比較に(二七)」)。
- (52) ポードマー／フライティンガー『文芸著作集』(レクラム文庫)一九八〇年(今日の正書法に綴りを改めず初版本より刊行)六〇頁。
- (53) 註(38)『十八世紀ドイツ文学論集』一五頁。『画家談論』原典四頁。註(44)ドイツ国民文学(DNL)第四二巻、一三頁以下参照。

(54) 右『十八世紀ドイツ文学論集』一六頁。『画家談論』原典六頁。註(53) DNL第四二巻、一六頁参照。

(55) ハルステルファーの『詩学速修法 (Poetischer Richter)』第二巻(一六四八年)の一〇の二や、マルティン著『ローエンシュタインの劇の文体』(一九二七年)七四頁とか、更に『新語辞典』(註(46))二二一頁に言及し、『人工楽園での祈り』(註(1))三四六頁に引用。

(56) 『ハラー詩集』(註(4))二四八頁以下に引用。
緊密な当時の英詩と比べ「浮腫んだ」の意。

(57) シラー全集(註(32))第一巻、三頁。

(9) 「神」と「虫蟻」

(58) 『スイス詩歌の試み』初版(註(1))より。

改稿後も話題の文言は変わらず、「三重に偉大なる神 (dreimal großer Gott)」(第四一旬)／「一匹の虫蟻の眷言集 (eines Wurmes Lobspruch)」(第四八旬)とある(註(4))『ハラー詩集』五頁。

(59) ポープ『人間論』第一書簡(一七三三年)第二三七句。マクミラン英文古典叢書『人間論』(初版一八九五年)一九一九年、一〇頁。

(60) カント『天界の一般自然史と理論』(一七五五年)第三部「補遺」に註(59)『人間論』第一書簡の第二三七句以下が独訳にて引用。プロイセン^{プロシヤ}学院版カント全集に拠る写真複製版作品集、一九六八年、第一巻、三二六頁。

(61) 『ハラー詩集』(註(4))四四頁。当該箇所にはハラー自身が脚註を附し、同様の考えをポープよりも早く述べた点を注記している。
「天使と^{妖怪}との中間存在 (Mittelding)」と更に『悪の根源について』第二書の一〇七句にも登場する(右『ハラー詩集』二二九頁)。

(62) 『仏和中辞典』(註(28))五八〇頁。

(63) 作品集(註(30))第六巻、九頁。

(64) 一七七一年版『頌歌集』(註(33))三三頁(第七節、第二五句―第二八句)。
『春の祝祭』初版(一七五九年)はレクラム文庫『クロプシュトック頌歌集』(註(33))五八頁以下に改訂一七七一年版と併せて刊行され、引用箇所はその六〇頁(第六節、第二九句―第三四句)にある。

(65) 『スイス詩歌の試み』初版(註(1))より。

改稿後(註(4))『ハラー詩集』(四頁)も文言は変わらず。

(66) シラー全集(註(32))第一巻、一九五頁。

(67) 『創世記』第一章の第二六節―第二七節を踏まえ、ゲーテ『ファウスト』第五一六句(註(30))作品集、第三巻、二四頁)を参照。

(68) 作品集(註(30))第三巻、二八頁。

(69) シラー全集(註(32))第一巻、一九三頁。

(70) ヘルダーリン『パンとぶどう酒』第四節、第五五句。註(9)全集、第二巻、九一頁。

※本研究(ドイツ思想詩の黎明(二))は、平成元年度「特定研究費」(西欧啓蒙主義の比較研究)による学術研究成果その二であり、その一(『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その五)との両方で、高知大学学術研究報告・第三十八巻・人文科学篇の第二分冊(全二五四頁)を特輯号となす。
研究代表者、高橋克己(人文学部助教、研究者番号五二四二〇二二七〇―一三)

刊行費 一二六〇千円(その一とその二の台本と抜刷に給付)より

(平成元年一九八九年 九月 一日受理)
(平成元年一九八九年二月二七日発行)

Welch eine Kette, die von Gott den Anfang nimmt, was für Naturen
Von himmlischen und irdischen, von Engeln, Menschen bis zum Vieh,
Vom Seraphim bis zum Gewürm! O Weite, die das Auge nie
Erreichen und betrachten kann,

Von dem Unendlichen zu dir, von dir zum Nichts!

(Pope „Ein Versuch über den Menschen“ I. Brief. V.237-241)

61) Haller „Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben“ (1729) V.17:
„Hallers Gedichte“ (2(1)4) S.44.

Unselig Mittel-Ding von Engeln und von Vieh!

17. Dieses ist einer der Gedanken, den der Verfasser mit dem Pope gemein
hat. Er ist aber einige Jahre eher von dem Schweizer als von dem Englän-
der gebraucht worden.

Vgl. Haller „Über den Ursprung des Übels“ Buch II. V.107: „Hallers Gedich-
te“ (2(1)4) S.129.

Zweideutig Mittelding von Engeln und von Vieh,

62) Dictionnaire Français-Japonais ROYAL (2(6)28). S.580.

Quand même Dieu n'existerait pas, la religion serait encore sainte et
divine.

(Baudelaire)

63) Goethe „Die Leiden des jungen Werthers“ (1774) Brief vom 10.5.1771: Ham-
burger Ausgabe (2(6)30). Bd.6. S.9.

... ; wenn ich das Wimmeln der kleinen Welt zwischen Halmen, die unzäh-
ligen, unergründlichen Gestalten der Würmchen, der Mückchen näher an
meinem Herzen fühle, und fühle die Gegenwart des Allmächtigen, der uns
nach seinem Bilde schuf, ... - dann sehne ich mich oft und denke: ...

64) Klopstock „Die Frühlingsfeier“ (1. Fas. „Das Landleben“ 1759) 6. Str. V.
29-34: Reclam-Oden (2(7)33) S.60; „Klopstocks Oden und Elegien“ Darmstadt
(Johann Georg Wittich) 1771. Faksimile-Nachdruck. Stuttgart (Metzler)

1974. „Das Landleben. 1759“ (S.1-6). S.2.

Aber, du Frühlingswürmchen,

VI

Das grünlichgolden

30

Neben mir spielt,

Du lebst;

Und bist, vielleicht --

Ach, nicht unsterblich!

65) Vgl. (2(1)1)/(2(1)4).

66) Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1. Fas. 1788. 24. Str. V.188-192:
Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(2(8)57). S.195.

Was ist neben Dir der höchste Geist

derer, welche Sterbliche gebahren?

Nur der Würmer Erster, Edelster.

190

Da die Götter menschlicher noch waren,
waren Menschen göttlicher.

67) „Biblia Germanica 1545“ (2(3)14) I. Teil. S.2: „Vulgata“ (2(3)14) I. S.5.

Gott schuff den Menschen Im zum Bilde / zum bilde Gottes schuff er jn,
ad imaginem Dei creavit illum („Genesis“ I. 27)

Vgl. Goethe „Faust“ V.516: Hamburger Ausgabe (2(6)30). Bd.3. S.24. FAUST:

Ich Ebenbild der Gottheit!

68) Goethe „Faust“ V.652f.: Hamburger Ausgabe (2(6)30). Bd.3. S.28. FAUST:

Den Göttern gleich' ich nicht! Zu tief ist es gefühlt;

Dem Wurme gleich' ich, der den Staub durchwühlt,

69) Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1. Fas. (2(9)66). 15. Str. V.113f.:
Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(2(8)57). S.193.

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen

richtete kein heiliger Barbar,

70) Hölderlin „Brod und Wein“ (1800-01) 4. Str. V.55f.: Stuttgarter Ausgabe
(2(1)9). Bd.2. S.91.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle,

Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?

Er hüllet die Begriff in Gleichniß und Figur,
 Als einen Kercker ein, verbirgt uns die Natur, 350
 Und meid't die Deutlichkeit, die uns ...

53) Bodmer/Breitinger „Die Discourse der Mahlern" Erster Discours des II. Theils (Bodmer) über „Das Reich der Freude". S.4/S.6: Minamiozi „Studien ... "(2(7)38) S.15f.

mit Hügeln / auf welchen Blumen ihre Hälse hervorreckten / die die heitersten Strahlen der Morgenröthe nachmahlten und die Gerüche von Balsam / Weyrauch und Myrrhen in unsere Nasen bließ. (S.4/S.6:S.15/S.16) unsere Blumen / die ungepfleget hier wie Rubinen brennen / dort ihre Blätter mit Atlas und Damast schmücken.

54) Vgl. (2(8)53).

55) Lohenstein „Venus" V.9-12: Martin, Walther „Der Stil in den Dramen Lohensteins"(Diss. Leipzig 1927) S.74; Guthke „Andacht ... "(2(1)1) S.346; Harsdörffer, Georg Philipp(1607-58) „Poetischer Trichter"(Theil I. 1650 / II. 1648 / III. 1653) Faksimile-Nachdruck. Hildesheim (Olms) 1971. S.49-69 (Die zehende Stund); Schönauich „Neologisches Wörterbuch"(2(8)46) S.211.

Ja selbst die zeit wird braut / die blumen-göttin schmücket
 Ihr selbst das braut-gewand / und ihre kunst-hand stücket 10
 Der Tellus grünen rock mit frischem rosen-schnee
 Und weissen liljen aus.

56) Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte" 4.Aufl. 1748. Vorrede: „Gedichte"(2(1)4) S.248f.

Meine Freunde werden mir es nach meiner so ernstlich bezeugten Sinnes- Aenderung vergeben, wann ich sage, daß Lohenstein mein erstes Vorbild und meine Aufmunterung zum Dichten gewesen. ...

Ich hatte indessen die englischen Dichter mir bekannter gemacht und von denselben die Liebe zum Denken und den Vorzug der schweren Dicht- kunst angenommen. Die philosophischen Dichter, deren Größe ich bewunderte, verdrangen (S.248/S.249) bald bey mir das geblähte und aufgedunsene Wesen dess Lohensteins, der auf Metaphoren wie auf leichten Blasen schwimmt.

57) Schiller „Der Abend"(1776) 3.Str. V.25-34: Weimarer Nationalausgabe(2(6)32). Bd.1. 1943. S.3.

O Anblik, wie entzükst du mich! 25
 Gold, wie das Gelb gereifter Saaten,
 Gold liegt um alle Hügel her,
 Vergöldet sind der Eichen Wipfel,
 Vergöldet sind der Berge Gipfel,
 Das Thal beschwimmt ein Feuermeer, 30
 Der hohe Stern des Abends stralet
 Aus Wolken, welche um ihn glühn,
 Wie der Rubin am falben Haar, das wallet
 Um's Angesicht der Königin.

(9) „GOTT" UND „WURM"

58) Vgl. (2(1)1)/(2(1)4).

59) Pope „An Essay on Man"(1733-34) London (Macmillan's English Classics) 1895(1.Aufl.). 1919. Epistle I. V.237-241. S.10f.

Vast chain of being! which from God began,
 Natures aethereal, human, angel, man,
 Beast, bird, fish, insect, what no eye can see,
 No glass can reach; from infinite to thee, S.10 240
 From thee to nothing. ... S.11

60) Kant „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels"(1755) Teil 3. Anhang. „Von den Bewohnern der Gestirne": Werke. Akademie-Textausgabe. Berlin (Gruyter) 1968. Bd.1. S.365.

Was sind alle diese herrliche Blümchen anders, als Lohensteinische und Hofmannswaldauische Brocken, die nach dem heutigen Geschmacke kaum in der Poesie, geschweige denn in der Prosa zu dulden sind. ... eine ausschweifende Einbildungs-Krafft ...

Vgl. Gottsched „Versuch einer Critischen Dichtkunst“ (1. Aufl. 1730) 4., vermehrte Aufl. Leipzig (Bernhard Christoph Breitkopf) 1751. Faksimile-Nachdruck. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1982. S.369 (I. 11).

25. §. Im Deutschen kann uns Lohenstein die Muster einer so schwülstigen Schreibart geben. Seine Tragödien sind überall damit angefüllt, und er verdienet deswegen der deutsche Seneca zu heißen. ...

Mit was für neu und ungewohnten Stralen,

Seh aber ich Burg, Stadt und Land gekrönt?

(I. Theil.

Ja einen neuen Stuhl mit Purpur aufgethrönt?

Das XI.

Der Donau Haupt mit Myrtenkränzen pralen?

Hauptstück)

Sich ihren Sand in Gold, ihr Schilf in Zuckerrohr,

Sein Schmelz in Diamant, den Schaum in Perlen kehren?

Was leuchtet aus Tyrol für ein Gestirn hervor?

Kann sein Erztreich Gebirg auch Sonnen nun gebähren?

Hier sind alle lohensteinische Schönheiten beysammen zu finden. ...

48) Königs Brief an Bodmer vom 28.3.1724: Minamiozi „Studien ...“ (2(7)38) S.36f.

... wider den bisher eingerissenen verdorbenen Geschmack ... Broks

... so hat er doch das Unglück, daß er die italienische Poesie mittlerer (S.36/S.37) Zeiten dem heutigen guten Geschmack der Franzosen, allen Kennern zu Trotz, überall vorgezogen wissen will; ...

49) Königs Brief an Bodmer vom 15.6.1726: Minamiozi „Studien ...“ (2(7)38) S.41.

... mit dem Beyspiele eines Patrons des üblen schwülstigen Geschmacks

... sonst es sehr leicht wäre, alle ausschweifende Red-Arten aus Lohenstein, Brocks, Amthorn und ihren Folgern zu beschützen.

50) Brocks „Auszug ...“ (2(5)24) S.182: „Die Sonne“ 7.Str. V.49-56.

Drauf erzeugt dein Glanz und bildet

Farben, Morgenröth' und Thau;

50

Malt, bepurpert und vergüldet

Das gemischte Silber-Grau:

(Aus dem I. Teil vom

Und der Himmel scheint ein Schleyer,

„Irdischen Vergnügen

Der aus Rosen, Gold und Feuer

in Gott“ 1721)

(Von der Luft Sapphir bezirckt)

55

Wunderbarlich schön gewirckt.

51) Breitinger, J.J. „Critische Abhandlung von der Natur, den Absichten und dem Gebrauche der Gleichnisse“ (Zürich. Conrad Orell und Comp. 1740) Faksimile-Nachdruck. Stuttgart (Metzler) 1967. S.430f. (14. Abschn.: Von den Gleichnissen in Brocks irdischem Vergnügen in Gott).

Mich düncket aber, daß den schönsten von seinen Beschreibungen noch öfters Fehler von dem unreinen Geschmack des Marino ankleben; daß er ... , daß die überflüssige Auszierung, dadurch das wahre Maß der (S.430/S.431) Natur aus der Acht gelassen wird, öfters die wesentlichen Schönheiten deren Dinge, die er beschreiben soll, nur verdunckeln. ...

52) Bodmer, J.J. „Character Der Teutschen Gedichte“ (1734) V.321f./V.331f./V.349ff.: Bodmer/Breitinger. Schriften zur Literatur. Reclam-Universal-Bibliothek Nr.9953. Stuttgart. 1980. S.59f.

Ein zorniges Gestirn hat Waldau hergebracht,

321

Den Schlegischen Marin, ...

322

...

S.59

Ihm fehlt' es an Verstand, den Geist geschickt zu lencken,

S.60

Und in die Fabel selbst der Wahrheit Schein zu sencken

331

332

...

D.Hirzels Frau, jung, mit vielsagenden blauen Augen, die Hallers Doris unvergleichlich wehmüthig singt, war die Herrin der Gesellschaft; ...
Vgl. Johann Kaspar Hirzels Brief an Kleist, Ewald aus Zürich vom 4. August 1750: Reclam-Klopstock-Oden. S.138ff.

Unser neun Freunde entschlossen uns, Klopstock durch eine Lustschiffahrt die Schönheiten der Gegenden am Zürchersee und zugleich die Schönheit unsrer Mädchen kennen zu lehren. ... Die süße Harmonie achtzehn edler Seelen machte diesen Tag (30.7.1750) zu einem der glücklichsten unsers Lebens und werth, Ihnen beschrieben zu werden. — ... Klopstock würdigte meine zärtliche Doris an seiner Hand zu führen. — — — ... (S.138/)

34) Schiller „Ueber naive ... " (2(6)32) Bd.20. S.436/S.452.

Der Dichter, sagte ich, ist entweder Natur, oder er wird sie suchen. Jenes macht den naiven, dieses den sentimentarischen Dichter. ... (S.436/S.452) ... Unter Deutschlands Dichtern in dieser Gattung will ich hier nur Hallers, Kleists und Klopstocks erwähnen. Der Charakter ihrer Dichtung ist sentimentalisch; durch Ideen rühren sie uns, nicht durch sinnliche Wahrheit, nicht sowohl weil sie selbst Natur sind, als weil sie uns für Natur zu begeistern wissen. ...

35) Schiller „Ueber naive ... " S.436(2(7)34).

36) Schiller „Ueber naive ... " S.452(2(7)34).

37) Hallers Brief an Gemmingen vom März 1772: „Tagebuch seiner Beobachtungen ... " Teil 2. S.119(2(6)29).

38) Minamiozi, Sin-iti: Studien zur Deutschen Literatur im 18. Jahrhundert. Tokyo (Sansyusya) 1983. S.1-55.

39) Minamiozi: op. cit. S.5.

40) Minamiozi: op. cit. S.1.

41) Minamiozi: op. cit. S.3. Anmerkung 7. Vgl. Martens, Wolfgang: Die Botschaft der Tugend. Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften. Stuttgart 1968.

42) Minamiozi: op. cit. S.4f. über Gottscheds „Die Vernünftigen Tadlerinnen" (1725-26).

43) Minamiozi: op. cit. S.25. Über „Die Discourse der Mahlern" (1721-23).

44) Minamiozi: op. cit. S.14. Anmerkung 19. Über „Die Discourse ... "

45) Minamiozi: op. cit. S.35. Anmerkung 56 über Johann Ulrich Königs Brief an J.J.Bodmer vom 28.3.1724 („Literarische Pamphlete aus der Schweiz. Nebst Briefen an Bodmer" hrsg. v. J.J.Bodmer. Zürich 1781) / S.37. Anmerkung 61 über Königs Briefe an Bodmer vom 15.5.1725, vom 15.6.1726 usw. (Brandl, Alois „B.H.Brockes ... Ein Beitrag zur deutschen Literatur im 18. Jahrhundert" Innsbruck 1878. Ergänzung).

(8) „LOHENSTEINISCHE UND HOFMANNSWALDAUISCHE BROCKEN"

46) Haller „Morgen-Gedanken" Str.2-4: (2(1)1)/(2(2)10)

Vgl. Schönaich, Christoph Otto: Die ganze Ästhetik in einer Nuss oder neologisches Wörterbuch. 1754. Faksimile-Nachdruck. Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts. Nr.70/81. 1898-1900. Nendeln/Liechtenstein (Kraus Reprint) 1968. S.27/S.147.

Ambra. In vier Versen ist hier der ganze Lohensteinische Raritätenkasten. Perlen, Rosen, Lilgen, Ambra, Thau, Atlas; nicht grauer Atlas, sondern Atlas grau; nach Hans Sachsens löblichen Muster. Haller. 2. S. Die Rosen öffnen sich, und ... Blätter Atlas grau. ... (S.27/S.147) ... 5. haben wir den hallerischen Wirbel, der vor funfzig Jahren unterm Namen des Lohensteinischen bekannt war. ...

Vgl. Guthke „Andacht ... " (2(1)1) S.331.

«Atlas-grau» in späteren Ausgaben, nachdem Schönaich «grau» als nachgestelltes Adjektiv mißverstanden hatte.

47) Gottsched „Der Biedermann" (1727-28) II. Teil. LVI(31.5.1728) über „Von dem Einfluß und Gebrauche der Einbildungs-Krafft" (1727) von Bodmer und Breitinger: Minamiozi „Studien ... " (2(7)38) S.33.

Nous n'avons qu'un flambeau, gardons-nous de l'éteindre.

Vgl. Rousseaus Brief an Voltaire vom 18. August 1756 über „Poème sur le Désastre de Lisbonne“(1756) und „Poème sur la Loi naturelle“(1756): Correspondance complète de Jean Jacques Rousseau. Tome IV 1756-1757. Genève (Institut et Musée Voltaire) 1967. S.37/S.49f.

Vos deux derniers Poèmes, Monsieur, me sont parvenus dans ma Solitude, ... D'ailleurs, plus vôtre second Poème m'enchanté, plus je prends librement parti contre le premier, ... Tous mes griefs sont donc contre vôtre „Poème sur le désastre de Lisbonne, parce que j'en attendrais des effets plus dignes de L'humanité qui parait vous l'avoir inspiré. ... (S.37/S.49) ... Vous nous avez donné dans vôtre „Poème sur la Religion (S.49/S.50) naturelle“, Le catéchisme de L'homme, donnez-nous maintenant dans celui que je vous propose Le Catéchisme du Citoyen. C'est une matière au reste à méditer longtemps, et peut-être à réserver pour le dernier de vos Ouvrages, afin d'achever, par un bienfait au genre-humain la plus brillante carrière que jamais homme de Lettres ait parcourüe. ... Toutes les sublinités de la métaphysique pourront bien aigrir mes douleurs, mais elles n'ébranleront point en moi la foi de L'immortalité de L'ame. Je la Sens, je la crois, je la veux, je l'espère, je la défendrai jusqu'à mon dernier Soupir, et ce sera de toutes les disputes que j'aurai soutenuës, la seule où mon intérêt ne sera pas oublié. ... L'hermitage. Le 18^e aoust 1756.

32) Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“(1795-96): Weimarer Nationalausgabe. (Hermann Böhlau Nachfolger) Bd.20. 1962. S.448.

Von der Voltairischen Satyre ... da kann er uns zwar als witziger Kopf belustigen, aber gewiß nicht als Dichter bewegen. Aber seinem Spott liegt überall zu wenig Ernst zum Grunde, und dieses macht seinen Dichterberuf mit Recht verdächtig. Wir begegnen immer nur seinem Verstande, nicht seinem Gefühl. Es zeigt sich kein Ideal unter jener luftigen Hülle, und kaum etwas absolut Festes in jener ewigen Bewegung. Seine wunderbare Mannichfaltigkeit in äussern Formen, weit entfernt für die innere Fülle seines Geistes etwas zu beweisen, legt vielmehr ein bedenkliches Zeugniß dagegen ab, denn ungeachtet aller jener Formen hat er auch nicht Eine gefunden, worinn er sein Herz hätte abdrücken können. Beynahe muß man also fürchten, es war in diesem reichen Genius nur die Armuth des Herzens, die seinen Beruf zur Satyre bestimmte. ...

Vgl. Goethes Brief an Stein, Charlotte vom 7. Jun. 1784: Hamburger Ausgabe. Briefe. Bd.1. 1962. S.440.

Dies ist überhaupt der Charakter aller Voltairischen Witz Producte, der bey diesen Bogen recht auffällt. Kein menschlicher Blutstrophe, kein Funcke Mitgefühl, und Honettät. Dagegen eine Leichtigkeit, Höhe des Geistes, Sicherheit die entzücken. Ich sage Höhe des Geistes nicht Höhe. Man kann ihn einem Luftballon vergleichen der sich durch eine eigne Luftart über alles weg schwingt und da Flächen unter sich sieht wo wir Berge sehn. ...

(7) „BALD BROKES, BALD LOHENSTEIN“

33) Klopstock „Der Zürchersee“(1750) 6.Str. V.21-24: Oden. Hamburg (Johann Joachim Christoph Bode) 1771. Faksimile-Nachdruck. Bern (Herbert Lang) 1971. S.117.

Hallers Doris, sie sang, selber des Liedes werth,	VI
Hirzels Daphne, den Kleist zärtlich wie Gleimen liebt,	22
Und wir Jünglinge sangen,	
Und empfanden, wie Hagedorn.	

Vgl. Klopstocks Brief an Johann Christoph Schmidt vom 1. August 1750: Oden. Reclam-Universal-Bibliothek Nr.1391. Stuttgart 1966. S.136f.

Ich hätte Ihnen sehr viel zu schreiben; ich will mich aber nur bey der Farth auf dem Zürchersee aufhalten, die mir ehegestern ungemein viel Vergnügen gemacht hat. ... (S.136/S.137) ...

31)Saulnier, Verdun-L.: La Littérature française du siècle philosophique (1715-1802) QUE SAIS-JE? Paris (Presses Universitaires de France) 1948. S.43.

Poèmes. — La grande poésie devait aussi assurer à Voltaire l'immortalité. Imbu de grand siècle, il s'essaya dans le genre suprême, l'épopée. „La Henriade" narre le siège de Paris par Henri III, sa mort, l'avènement de Henri IV; dix chants respectueux des thèmes et procédés traditionnels; tempête, combats, récits du héros, songes prophétiques, ravissements hors de la terre, tout s'y retrouve, avec un merveilleux allégorique très froid: la Discorde et la Politique sont divinités sans chair. L'inspiration est nouvelle: philosophique, comme toujours chez Voltaire, heureux de placer un plaidoyer pour la tolérance. Il ne souffrira plus de rechute épique qu'avec la „Pucelle". Même volonté de s'illustrer dans les grands genres classiques avec l'„Ode à la vérité" ou le „Poème de Fontenoy", de facture aujourd'hui bien fade.

Les poèmes philosophiques ont plus de valeur. „Le Mondain"(1736) est une apologie intelligente des progrès de la civilisation matérielle: le luxe est une nécessité de l'état, il assure à la fois le goût du travail et du bien-être. Les 7 „Discours sur l'homme"(1738) développent sur des thèmes évocateurs (l'Egalité des conditions, la Liberté, la Modération en tout) des pensers assez simples.

Enfin aux petits vers Voltaire prodigue son esprit, épigrammes ou madrigaux adressés en particulier à Mme du Châtelet.

Vgl. Chénier „Essai sur les causes et les effets de la perfection et de la décadence des Lettres et des Arts" Deuxième Partie. Chapitre IV. Histoire du style et du goût: OEuvres complètes(2(6)30). S.666/S.668f.

Voltaire ... (S.666/S.668) ... Je suis donc bien loin de lui vouloir contester des talents faits pour atteindre aux plus hauts points de perfection dans les arts. Si le ciel les lui avait refusés, je ne l'accuserais point; je le plaindrais sans venir l'insulter sur sa faiblesse et lui faire un crime de sa pauvreté. ... (S.668/S.669) ... Je me plains que, dans la confiance et la sécurité que lui inspirait l'aveugle admiration de ses contemporains pour tout ce qui sortait de sa plume, il se soit trop souvent hâté de publier des esquisses au lieu d'achever des tableaux, et qu'il ait mis au jour nombre d'ouvrages qui devaient plus compter sur son nom que sur leur mérite. Je ne voudrais point que son poème de la „Loi naturelle", matière aussi vaste et aussi sublime que celle de l'„Essai sur l'Homme", et qui eût dû lui faire produire une poème aussi bien que celui de Pope, où la nature entière se présentait à lui pour être peinte de sa main, qui enfin lui fournissait en abondance tout ce que la morale a de plus propre à toucher, à pénétrer le coeur des hommes, et tout ce que la poésie a de plus magnifique et de plus grand, ne fût qu'un croquis informe, sans plan, sans suite, sans liaison, écrit d'un ton absolument indigne de la noblesse et de la majesté du sujet, où les plus grandes choses sont étranglées et ne sont jamais traitées avec l'étendue et les développements qui leur conviennent, et où plusieurs endroits excellents, et faits comme ils devaient l'être, demandent grâce pour la faiblesse du reste et ne servent qu'à la faire mieux sentir. ...

Vgl. Voltaire „Poème sur la Loi naturelle"(1756) Deuxième Partie. V.41-43/ V.112-114: Mélanges. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1961. S.279f.

De nos désirs fougueux la tempête fatale
Laisse au fond de nos coeurs la règle et la morale.
C'est une source pure: ...

42

S.279
S.280

Mais, dans les profondeurs de cette obscurité,
Si la raison nous luit, qu'avons-nous à nous plaindre?

113

weilen grosse Schönheiten, er überlies sich aber allzusehr der unendlichen Fertigkeit, mit welcher ihm die Reime aus der Feder giengen. ... und ich schrieb eine Unendlichkeit von Versen von allen Arten, ehe ich fünfzehnjährig wurde; meine Begierde war unersättlich; ich ahmte bald Brokes, bald Lohenstein, und bald andere niedersächsische Dichter nach, indem ich eines von ihren Gedichten zum Muster vor mir nahm, und ein anderes ausarbeite, das nichts dem Muster nachgeschrieben, und doch ihm ähnlich seyn sollte. ... (2(7)37)

(Brief an Eberhard Fr. Gemmingen vom März 1772: Sammlung kleiner Hallerischer Schriften. 1756. 2., verbess. u. vermehrte Aufl. in 3 Theilen. Bern (Emanuel Haller) 1772 (nur Theil 1 in 2. Aufl.: entspricht der Ausgabe von 1756; Theil 2 und 3 sind neu hinzugekommen) Theil 3. S.337ff.)

30) Goethe „Faust“ „Nacht“ V.534-537; Werke. Hamburger Ausgabe. München (Beck/dtv) 1981/1982. Bd.3. S.25. FAUST:

Wenn ihr's nicht fühlt, ihr werdet's nicht erjagen,
Wenn es nicht aus der Seele dringt 535
Und mit urkräftigem Behagen
Die Herzen aller Hörer zwingt.

Vgl. Goethe „Urfaust“ (1773-75) „Nacht“ V.181-184; Hamburger Ausgabe. Bd.3. S.372. FAUST:

Wenn Ihr's nicht fühlt, Ihr werdet's nicht erjagen,
Wenns Euch nicht aus der Seele dringt
Und mit urkräftigem Behagen
Die Herzen aller Hörer zwingt.

Vgl. Chénier, André (1762-94) „L'Invention“ V.173-184/V.331-338: OEuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1958. S.127/S.131.

O terre de Pélopos! avec le monde entier
Allons voir d'Épidaure un agile coursier
Couronné dans les champs de Némée et d'Élide; 175
Allons voir au théâtre, aux accents d'Euripide,
D'une sainte folie un peuple furieux
Chanter: Amour, tyran des hommes et des Dieux.
Puis, ivres des transports qui nous viennent surprendre,
Parmi nous, dans nos vers, revenons les répandre; 180
Changeons en notre miel leurs plus antiques fleurs;
Pour peindre notre idée, empruntons leurs couleurs;
Allumons nos flambeaux à leurs feux poétiques;
Sur des pensers nouveaux faisons des vers antiques.

...

S.127
S.131

Celui qu'un vrai démon presse, enflamme, domine,
Ignore un tel supplice: il pense, il imagine;
Un langage imprévu, dans son âme produit,
Naît avec sa pensée, et l'embrasse et la suit;
Les images, les mots que le génie inspire, 335
Où l'univers entier vit, se meut et respire,
Source vaste et sublime et qu'on ne peut tarir,
En foule en son cerveau se hâtent de courir.

Vgl. Chénier „Varia“ „Épilogue“ V.1f.: OEuvres complètes. S.614.

L'art des transports de l'âme est un faible interprète;
L'art ne fait que des vers; le cœur seul est poète.

Vgl. Baudelaire: OEuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Tome II. Critique littéraire. „Théophile Gautier. I“ III. S.110.

Tout écrivain français, ardent pour la gloire de son pays, ne peut pas, sans fierté et sans regrets, reporter ses regards vers cette époque de crise féconde où la littérature romantique s'épanouissait avec tant de vigueur. Chateaubriand, toujours plein de force, mais ... ; Victor Hugo, Sainte-Beuve, ... Car André Chénier, avec sa molle antiquité à la Louis XVI, n'était pas un symptôme de rénovation assez vigoureuse, et ...

Die, wohl mit Recht, ein Bild der Ewigkeiten heißt,
 So nur aus Gott allein, ohn' End' und Anfang, stammen.
 Es schlug des Abgrunds Raum, wie eine dicke Fluth 10
 Des Boden-losen Meers auf sinckend Eisen thut,
 In einem Augenblick, auf meinen Geist zusammen.
 Die ungeheure Gruft voll unsichtbaren Lichts,
 Voll lichter Dunkelheit, ohn' Anfang, ohne Schrancken;
 Verschlang so gar die Welt, begrub selbst die Gedancken; 15
 Mein gantzes Wesen ward ein Staub, ein Punct, ein Nichts,
 Und ich verloh'r mich selbst. Dieß schlug mich plötzlich nieder;
 Verzweiflung drohete der gantz verwirrten Brust:
 Allein, o heilsams Nichts! glückseliger Verlust!
 Allgegenwärt'ger Gott, in Dir fand ich mich wieder.
 Vgl. Richter, Karl „Die kopernikanische Wende in der Lyrik von Brockes bis
 Klopstock" II: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft. Bd.12. 1968.
 S.139f.

Verdeutlichen wir uns diesen Sachverhalt am Gedicht „Das Firmament", mit
 dem Brockes das erste Buch seines neunbändigen Werkes eröffnete: ...
 Die vom Blick in das All ausgelöste Erregung geht nicht nur in die Weise
 des lyrischen Sprechens ein, sondern sie bestimmt zugleich den ganzen
 inneren Vorgang des Gedichts, der gewisse Wandlungen der mensch- (S.139/
 S.140) lichen Reaktion festhält. Die erste Antwort bedeutet ein Einge-
 ständnis des Ungenügens. Vor dem Unendlichen versagen die menschlichen
 Kräfte. Verzweiflung droht, weil der Mensch sich selbst verloren zu ha-
 ben scheint. Doch Erniedrigung und Selbstverlust behalten nicht das letz-
 te Wort. Sie erweisen sich nur als Voraussetzung, als Durchgangphase,
 bevor sich der Mensch auf höherer Ebene zurückerhält. Wir beobachten ei-
 ne Abfolge von Bestürzung und Beseligung, Erniedrigung und Erhöhung, die
 in dieser oder ähnlicher Gestalt bei Brockes, aber auch bei Haller oder
 Klopstock, keine Seltenheit darstellt. Bodmer hat sie in seinen Ausfüh-
 rungen „Von dem Großen in der materialischen Welt" weiter erläutert. ...
 25) „Unvollkommene Ode über die Ewigkeit" 10.Str. V.80-84(2(3)15).
 26) Pascal, Blaise „Pensées" Brunsvicg-Ausgabe Nr.206: OEuvres complètes.
 Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Gallimard) 1954. S.1113(Nr.91).
 Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.

(6) „UNENDLICHE FERTIGKEIT" UND „EINE INNERE STIMME"
 27) Voltaire „Lettres philosophiques"(1734ff.) Classiques Garnier. Paris.
 1964. S.148: Vingt-cinquième lettre. VI.

Pour moi, quand je regarde Paris ou Londres, je ne vois aucune raison
 pour entrer dans ce désespoir dont parle M. Pascal; je vois une ville
 qui ne ressemble en rien à une île déserte, mais peuplée, opulente, po-
 licée, et où les hommes sont heureux autant que la nature humaine le com-
 porte. Quel est l'homme sage qui sera prêt à se prendre parce qu'il ne
 sait pas comme on voit Dieu face à face, et que sa raison ne peu débrouil-
 ler le mystère de la Trinité? Il faudrait autant se désespérer de n'avoir
 pas quatre pieds et deux ailes.

28) Nouvelle Histoire de l'Église. Vol.4. Siècle des Lumières, Révolution,
 Restauration. Paris (Seuil) 1966. Japanische Übersetzung hrsg. v. dem Insti-
 tut für Mittelalterliche Theologie und Philosophie der Sophia-Univ. in To-
 kyō. Die Geschichte des Christentums. Bd.7. Die Zeit der Aufklärung und Re-
 volution. Kôdansya-Verlag. 1981, S.36: Dictionnaire Français-Japonais ROYAL.
 Tokyo (Ôbunsha) 1985. S.580.

Si Dieu n'existait pas, il faudrait l'inventer. (Voltaire)

29) Haller „Tagebuch seiner Beobachtungen ... "(2(4)21) Teil 2. S.119.
 Hagedorn ist in eben dem Jahre, aber sechs Monate früher als ich, gebo-
 ren. Beyde kamen wir in eine Zeit, da die Dichtkunst aus Deutschland sich
 verlohren hatte. Denn Brokes und Pietsch hatten einzelne, und jener zu-

no, et infiniti raggioneuolmente si argumentano. L'vniuerso, immenso, et infinito, é il composto che resulta da tal spacio et tanti compresi corpi.

Vgl. Bruno „Zwiegespräche vom unendlichen All und den Welten“ verdeutscht von Kühlenbeck, Ludwig. (Gesammelte Werke. Bd.3) 2.Aufl. Jena (Eugen Diederichs) 1904. S.86(Dritter Dialog).

Einzig ist also der Himmel, der unermeßliche Raum, der universelle Schoß, der Allumfasser, die Ätherregion, innerhalb deren alles sich regt und bewegt. In ihm sind zahlreiche Sterne, Gestirne, Weltkugeln, Sonnen und Erden sichtbarlich wahrnehmbar und müssen unzählige andre vernünftigerweise angenommen werden. Das unendliche und unermeßliche All ist das zusammenhängende Ganze, das aus diesem Raume und den in ihm befindlichen Körpern resultiert.

20) Bruno „De l'infinito ...“ 353: Le opere italiane(2(4)19). Vol.1. S. 297(Argomento del Secondo Dialogo).

Et indi si fá aperta la uanità de gl' argomenti di Aristotele il quale argumentando contra quei che poneno il mondo infinito, suppone il mezzo et la circonferenza, et vuole che nel finito ò infinito la terra ottegna il centro. In conclusione non é proposito grande ó picciolo che habbia amenato questo filosofo per distruggere l'infinitá del mondo, tanto dal primo libro del cielo et mondo, quanto dal terzo de la physica ascoltazione: circa il quale non si discorra assai piu che á bastanza.

Vgl. „Zwiegespräche vom unendlichen All und den Welten“(2(4)19) S.12 (Beweisführung im zweiten Dialog).

Schließlich gibt es keinen großen oder kleinen Satz von allem, was dieser Philosoph, um die Unendlichkeit des Alls zu widerlegen, sowohl im I. Buch über „das Himmelsgebäude“ als auch im III. seiner „Physik“ verbringt, womit man nicht in offenen Widerspruch geraten müßte.

21) Haller „Tagebuch seiner Beobachtungen über Schriftsteller und über sich selbst“(Bern. Nicolaus Emanuel Haller. 1787) Frankfurt am Main (Athenäum) Faksimile-Nachdruck. 1971. Teil 2. S.114f.

Die Ptolomäische Einrichtung war falsch, niemand zweifelt mehr an ihrem Ungrunde: viele Erfahrungen die richtig waren, lagen unter noch mehrern Meinungen, die nichts Wahres hatten, vermischt; und dennoch hatte die Welt mit einem sehr grossen Nutzen diese Hypothese so viele Jahre gebraucht, und davon im gemeinen Leben fast eben den Vortheil gehabt, den wir von der Wahrheit selber haben. Endlich ist der Tag gekommen, und hat den krystallinen (S.114/S.115) Himmel, die übermüthige Lage der Erde in der Mitte der Welt, die unnöthige Geschwindigkeit der Sonne und der Fixsterne, und die andern Fehler dieses Lehrgebäudes, von dem Wahren getrennet. ...

(„Vorrede zu der deutschen Uebersetzung von Buffons Naturgeschichte 4.

Hamb. 1761“: „Histoire naturelle générale et particulière“ 1750-1804)

°Erst 1757 wurde Kopernikus vom Index abgesetzt.

22) „Unvollkommene Ode über die Ewigkeit“ 6.Str. V.37 (2(3)15).

23) „Unvollkommene Ode über die Ewigkeit“ 10.Str. V.82 (2(3)15).

(5) „ALLGEMEINES NICHTS“ UND „HEILSAMS NICHTS“

24) Brockes „Auszug der vornehmsten Gedichte aus dem Irdischen Vergnügen in Gott“ Hamburg (Christian Herold) 1738. Faksimile-Nachdruck. Stuttgart (J.B. Metzler) 1965. S.477: „Das Firmament“ 20 Verse.

Als jüngst mein Auge sich in die Sapphirne Tiefe,
Die weder Grund, noch Strand, noch Ziel, noch End' umschrenckt,
Ins unerforschte Meer des holen Luft-Raums, senckt',
Und mein verschlung'ner Blick bald hie, bald dahin liefe,
Doch immer tiefer senckt; entsatzte sich mein Geist,
Es schwindelte mein Aug', es stockte meine Seele
Ob der unendlichen, unmäßig-tiefen Höle,

- Vollkommenheit der Grösse! (11) 85 2(3)15-(4)19
 Was ist der Mensch der gegen dich sich hält!
 Er ist ein Wurm / ein Sandkorn in der Welt.
 Die Welt ist selbst ein Punct wann ich an dir sie messe.
 Nur halb gereiftes Nichts / seit gestern bin ich kaum /
 Und morgen wird ins Nichts mein halbes Wesen kehren / 90
 Mein Lebens-Lauf ist wie ein Mittags-Traum /
 Wie hoft er dann den deinen auszuwähren.
- Ich ward / nicht aus mir selbst / nicht weil ich werden wolte / (12)
 Ein etwas das mir fremd / das nicht ich selber war /
 Ward auf dein Wort mein Ich. Zu erst war ich ein Kraut 95
 Sich unbewußt / noch unreif zur Begier /
 Und lange war ich noch ein Thier
 Da ich ein Mensch schon heißen sollte.
 Die schöne Welt / war nicht für mich gebaut /
 Mein Ohr verschloß ein Fell / mein Aug ein Staar / 100
 Mein Denken stieg nur noch biß zum Empfinden /
 Mein ganzes Kenntnüß war / Schmerz / Hunger und die Binden.
- Zu diesem Wurme kam noch mehr von Erdenschollen (13)
 Und etwas weißer Saft /
 Ein inn'rer Trieb fing an die schlaffen Sehnen 105
 Zu meinen Diensten auszudehnen /
 Die Füße lernten gehn durch Fallen /
 Die Zunge reiffete zum Lallen
 Und mit dem Leibe wuchs der Geist.
 Er prüfte nun die ungeübte Kraft 110
 Wie Mücken thun die von der Wärme dreist
 Halb Würmer sind und fliegen wollen.
 Ich starrte jedes Ding als fremde Wunder an /
 Ward reicher jeden Tag / sah vor und hinder heute /
 Maaß / rechnete / verglich / erwählte / liebte / scheute / 115
 Ich irrte / fehlte / schlief' / und ward ein Mann.
- Dann kommt die 14. Strophe in der 4., verm. und veränd. Aufl. vom „Versuch Schweizerischer Gedichte“(Göttingen. Abram Vandenhoeck. 1748) S.228: „Gedichte und Interpretationen“(Reclam) Bd.2(2(3)15). S.71.
- Itzt fühlet schon mein Leib, die Näherung des Nichts, (14)
 Des Lebens lange Last erdrückt die müden Glieder;
 Die Freude flieht von mir, mit flatterndem Gefieder,
 Der sorgenfreyen Jugend zu. 120
 Mein Eckel, der sich mehrt, verstellt den Reitz des Lichts,
 Und streuet auf die Welt den Hofnungslosen Schatten.
 Ich fühle meinen Geist in jeder Zeil' ermatten,
 Und keinen Trieb, als nach der Ruh.
- 16) „Unvollkommene Ode über die Ewigkeit“ 10.Str. V.75-76 (2(3)15).
 17) Menge-Güthling „Langenscheidts Großwörterbuch. Griechisch-Deutsch“ 22. Aufl. Berlin/München 1973. S.401.
 κόσμος, ... Ordnung ... Gebühr ... Weltall, Welt ... Schmuck ...
- (4) „DAS UNENDLICHE UNIVERSUM“ UND „DER KRYSTALLENE HIMMEL“
 18) Bruno, Giordano „De l'infinito, universo, et mundi“(1584)
 19) Bruno „De l'infinito ... “ 433: Le opere italiane ristampate da Lagarde, Paolo. Volume primo. Göttingen (Dieterichsche Universitätsbuchhandlung) 1888. S.343(Dialogo Terzo).
 Vno dunque é il cielo, il spacio immenso, il seno, il continente uniuersale, l'etherea regione per la quale il tutto discorre et si muoue. Iui innumerabili stelle, astri, globi, soli, et terre sensibilmente si ueggo-

Forchtbares Meer der ernstest Ewigkeit!	(5)	2(3)15
Uralter Quell von Welten und von Zeiten!		
Unendlichs Grab von Welten und von Zeit.		
Beständig Reich der Gegenwärtigkeit!		
Die Asche der Vergangenheit		35
Ist dir ein Keim von Künftigkeiten.		
Unendlichkeit! wer misset dich?	(6)	
Bey dir sind Welten Tag' und Menschen Augenblicke.		
Vielleicht die tausendste der Sonnen welzt itzt sich /		40
Und tausend bleiben noch zurücke.		
Wie eine Uhr beseelt durch ein Gewicht /		
Eilt eine Sonn aus GOTTes Kraft bewegt:		
Ihr Trieb lauft ab / und eine andre schlägt /		
Du aber bleibst und zählst sie nicht.		
Der Sternen stille Majestät /	(7)45	
Die uns zum Ziel befestigt steht /		
Eilt vor dir weg / wie Gras an schwülen Sommer-Tagen /		
Wie Rosen die am Mittag jung /		
Und welk sind vor der Dämmerung /		50
Ist gegen dich der Angelstern und Wagen.		
Als mit dem Unding noch das neue Wesen rang /	(8)	
Und kaum noch reif die Welt / sich aus dem Abgrund schwang /		
Eh als das Schwere noch den Weg zum Fall gelernet /		
Und auf die Nacht des alten Nichts /		55
Sich goß der erste Strom des Lichts /		
Warst du so weit als itzt von deinem Quell entfernt.		
Und wann ein zweytes Nichts wird diese Welt begraben;		
Wann von dem ganzen All / nichts bleibt als die Stelle;		
Wann mancher Himmel noch / von andern Sternen helle		60
Wird seinen Lauf vollendet haben /		
Wirst du so jung als itzt / von deinem Tod gleich weit /		
Gleich ewig künftig seyn / wie heut.		
Die schnellen Schwingen der Gedanken	(9)	
Wogegen Zeit / und Schall / und Wind		
Und selbst des Lichtes Flügel langsam sind /		65
Ermüden über dir / und hoffen keine Schranken;		
Ich häuffe ungeheure Zahlen		
Gebürge Millionen auf.		
Ich welze Zeit auf Zeit / und Welt auf Welt zu Hauf /		
Und wann ich von der grausen Höhe		70
Mit Schwindeln wieder nach dir sehe /		
Ist alle Macht der Zahl vermehrt mit tausend mahlen		
Noch nicht ein Theil von dir /		
Ich zieh sie ab und Du liegst ganz vor mir.		
O GOTT du bist allein des Alles Grund /	(10)75	
Du Sonne bist das Maaß der ungemessnen Zeit /		
Du bleibst in gleicher Kraft und stetem Mittag stehen /		
Du giengest niemals auf und wirst nicht untergehen /		
Ein einzig Itzt in dir / ist lauter Ewigkeit.		
Ja / könnten nur in dir die festen Kräfte sinken		80
So würde bald mit aufgesperrtem Schlund		
Ein allgemeines Nichts des Wesens ganzes Reich /		
Die Zeit und Ewigkeit zugleich /		
Als wie der Ocean ein Tröpfgen Wasser trinken.		

Vgl. Guthke „Andacht ... "(2(1)1) S.346.

Kohlschmidt, Werner („Hallers Gedichte und die Tradition" In: „Dichter, Tradition und Zeitgeist" Bern 1965. S.206ff.) spricht S.214-215 von Anregung durch Shaftesbury, ohne die Frage zu untersuchen, ob, wie und in welcher Form (Übersetzung?) Haller der Text zugänglich gewesen sein könnte. Eine deutsche Fassung lag vor J.J.Spaldings Übersetzung von 1745 nicht vor, auch keine französische, die er 1725 hätte benutzen können; Englisch lernte Haller aber erst 1727 in England (vgl. Albrecht Hallers Tagebücher seiner Reisen nach Deutschland, Holland und England, 1723-1727, hrsg. von Erich Hintzsche, Bern 1971, S.87) und 1728 in Basel.

(3) „DAS UNGEMESSENE ALL" UND „DER GOTTHEIT GROSSE STADT"

12) „Morgen-Gedanken"(2(1)1) Str.10. V.37-40.

13) „Morgen-Gedanken"(2(2)10) Str.10. V.37-40.

14) Biblia Hebraica Stuttgartensia. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967/1977/1984. S.1; Septuaginta. Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1935/1979. Vol.1. S.1; Biblia iuxta Vulgatam Versionem. Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1969. 3.Aufl. 1983. Tomus I. S.4; Biblia Germanica 1545 nach Luther. Faksimile-Nachdruck. Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1967/1983. I.Teil. S.1: „Genesis" I. lff.

In principio creavit Deus caelum et terram ...

AM anfang schuff Gott Himel vnd Erden. ...

15) Haller „Unvollkommene Ode über die Ewigkeit" 13 Strophen. 116 Verse: „Versuch Schweizerischer Gedichte" 3., verm. und veränd. Aufl. Bern (Nicolaus Emanuel Haller) 1743. S.149-153; Gedichte und Interpretationen 2.Bd. Reclam-Universal-Bibliothek Nr.7891. Stuttgart 1983. S.67-71.

Ihr Wälder! wo kein Licht durch finstre Tannen strahlt / (1)

Und sich in jedem Busch die Nacht des Grabes mahlt:

Ihr holen Felsen dort! wo im Gesträuch verirret

Ein trauriges Geschwärm einsamer Vögel schwirret:

Ihr Bäche! die ihr matt in dürren Angern fließt / 5

Und den verlohrenen Strom in öde Sümpfe gießt:

Erstorbenes Gefild' und Grausen-volle Gründe!

O daß ich doch bey euch / des Todes Farben fünde!

O nährt mit kaltem Schaur / und schwarzem Gram mein Leyd!

Seyd mir ein Bild der Ewigkeit! 10

Mein Freund ist hin. (2)

Sein Schatten schwebt mir noch vor dem verwirrten Sinn;

Mich dünkt ich seh sein Bild / und höre seine Worte:

Ihn aber hält am ernstesten Orte

Der nichts zurücke läßt 15

Die Ewigkeit mit starken Armen fest.

Noch heut war er was ich / und sah auf gleicher Bühne / (3)

Dem Schauspiel dieser Welt / wie ich / beschäftigt zu.

Die Stunde schlägt und in dem gleichen Nu

Ist alles nichts so wirklich als es schiene. 20

Die dicke Nacht der öden Geister-Welt

Umringt ihn itzt / mit Schrecken-vollen Schatten /

Und die Begier ist was er noch behält /

Von dem was seine Sinnen hatten.

Und ich? bin ich von höhern Orden? (4)25

Nein / ich bin was er war / und werde was er worden.

Mein Morgen ist vorbey / mein Mittag rückt mit Macht:

Und eh der Abend kömmt / kan eine frühe Nacht /

Die keine Hofnung mehr zum Morgen wird versüssen /

Auf ewig meine Augen schliessen. 30

Des weiten Himmel-Raums saphirene Gewölber, (10)
 Gegründet auf den leeren Ort,
 Der Gottheit große Stadt, begränzt nur durch sich selber,
 Hob aus dem nichts dein einzig Wort. 40

Doch, dreimal großer Gott! es sind erschaffne Seelen (11)
 Für deine Thaten viel zu klein;
 Sie sind unendlich groß, und wer sie will erzählen,
 Muß, gleich wie du, ohn Ende sein!

O Unbegreiflicher! ich bleib in meinen Schranken, (12)45
 Du, Sonne, blendst mein schwaches Licht;
 Und wem der Himmel selbst sein Wesen hat zu danken,
 Braucht eines Wurm's Lobspruch nicht.

1) Shaftesbury, Ashley „The Moralists“ (1709) Part III. Sect. I; „Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times“ 1. Aufl. 1711. S.384f. / 2. Aufl. 1714. S.384f.: Stuttgarter STANDARD EDITION. Sämtliche Werke, ausgewählte Briefe und nachgelassene Schriften. In englischer Sprache mit deutscher Übersetzung. Stuttgart-Bad Cannstatt (Fromann, Friedrich / Holzboog, Günther) Reihe II. Vol.1. 1987. S.300/S.302.

where vast Sea-Monsters pierce thro floating Islands, with Arms which can withstand the Chrystal Rock: whilst others, who of themselves seem great as Islands, are by their Bulk alone arm'd against all but Man; whose Superiority over Creatures of such stupendous Size and Force, shou'd make him mindful of his Privilege of Reason, and force him humbly to adore the great Composer of these wondrous Frames, and Author of his own superiour Wisdom. ... (S.384/S.385:S.300/S.302) ... How gravely move the largest of Land-Creatures on the Banks of this fair River! How ponderous are their Arms, and vast their Strength, with Courage, and a Sense superiour to the other Beasts! Yet are they tam'd (we see) by Mankind, and brought even to fight their Battels, rather as Allies and Confederates, than as Slaves. — ...

Vgl. „The Sociable Enthusiast“ (The first Version of „The Moralists“) 1704. Part III. S.177/S.178f.: op. cit. S.301/S.303.

where vast Sea-monsters pierce thro floating Islands, ... (S.177/S.178: S.301/S.303) ... How gravely move the largest of Land-Creatures on the Banks of this fair River! ... (S.178/S.179)

Vgl. Shaftesbury: Ein Brief über den Enthusiasmus / Die Moralisten. In der Übersetzung von Frischeisen-Köhler. Philosophische Bibliothek Bd. 111. Hamburg (Felix Meiner) 1909. 2. Aufl. 1980. S.171/S.172(3. Teil. 1. Abschnitt).

Denn endlich nähert sich ihnen die Sonne, schmilzt den Schnee, setzt die sich sehnenen Menschen in Freiheit und gibt ihnen Mittel und Zeit, sich für die Wiederkehr der Kälte zu versorgen. Sie zerbricht die Eisfesseln des Ozeans, wo mächtige Seeungeheuer mit Waffen, die den kristallinen Felsen widerstehen können, die schwimmenden Inseln durchbrechen; während andere, die selbst so groß wie Inseln scheinen, durch ihre Größe gegen alles, den Menschen ausgenommen, gewaffnet sind, dessen Übermacht über Geschöpfe von solch ungeheurer Größe und Stärke ihn sein Vorrecht der Vernunft schätzen lehren und ihn zwingen sollte, in Demut den erhabenen Werkmeister dieser wunderbaren Maschine und Urheber seiner eigenen überlegenen Weisheit anzubeten. ... (S.171/S.172) ... Wie gravitatisch wandeln die größten Landgeschöpfe an den Ufern dieses schönen Flusses! Wie schwer sind ihre Waffen! wie gewaltig ihre Stärke, verbunden mit einem Mut und einem Verstand, wie kein anderes Tier sich ihrer rühmen kann! Und doch werden sie, wie wir sehen, vom Menschen gezähmt und abgerichtet, seine Schlachten zu fechten, mehr als Verbündete und Eidgenossen denn als Sklaven. ...

Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,
Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang.

20

(2) „FISCH DER STRÖME BLÄSST“ UND „ELEFANT“

10) Haller „Morgen-Gedanken“ 48 Verse (2(1)1).

Vgl. „Hallers Gedichte“ (2(1)4) S.3-5: „Morgen-Gedanken“ 12 Str. 48 Verse.

Dieses kleine Gedicht ist das älteste unter denen, die ich der Erhaltung noch einigermaßen würdig gefunden habe. Es ist auch die Frucht einer einzigen Stunde und deswegen auch so unvollkommen, daß ich ein billiges bedenken getragen habe, es beizubehalten. Die Kenner werden deswegen und in Betracht des unreifen Alters des Verfassers es mit schonenden Augen ansehen:

Der Mond verbirget sich, der Nebel grauer Schleier I. (1)
Deckt Luft und Erde nicht mehr zu;
Der Sterne Glanz erblasst, der Sonne reges Feuer
Stört alle Wesen aus der Ruh.

Der Himmel färbet sich mit Purpur und Saphiren, (2) 5
Die frühe Mogen-Röthe lacht;
Und vor der Rosen Glanz, die ihre Stirne zieren,
Entflieht das bleiche Heer der Nacht.

Durchs rothe Morgen-Thor der heitern Sternen-Bühne (3)
Naht das verklärte Licht der Welt; S.3 10
Die falben Wolken glühn von blitzendem Rubine, S.4
Und brennend Gold bedeckt das Feld.

Die Rosen öffnen sich und spiegeln an der Sonne (4)
Des kühlen Morgens Perlen-Thau;
Der Lilgen Ambra-Dampf belebt zu unsrer Wonne 15
Der zarten Blätter Atlas-grau.

Der wache Feld-Mann eilt mit singen in die Felder (5)
Und treibt vergnügt den schweren Pflug;
Der Vögel rege Schaar erfüllet Luft und Wälder
Mit ihrer Stimm und frühem Flug. 20

O Schöpfer! was ich seh, sind deiner Allmacht Werke! II. (6)
Du bist die Seele der Natur;
Der Sterne Lauf und Licht, der Sonne Glanz und Stärke
Sind deiner Hand Geschöpf und Spur.

Du steckst die Fackel an, die in dem Mond uns leuchtet, (7) 25
Du giebst den Winden Flügel zu;
Du leihst der Nacht den Thau, womit sie uns befeuchtet,
Du theilst der Sterne Lauf und Ruh.

Du hast der Berge Stoff aus Thon und Staub gedrehet, (8)
Der Schachten Erzt aus Sand geschmelzt; 30
Du hast das Firmament an seinen Ort erhöht,
Der Wolken Kleid darum gewelzt.

Den Fisch, der Ströme bläst und mit dem Schwanze stürmet, (9)
Hast du mit Adern ausgehölt; S.4
Du hast den Elephant aus Erden aufgethürmet S.5 35
Und seinen Knochen-Berg beseelt.

°Der sechszehn und ein halbes Jahr noch nicht erreicht hatte.

2(1)3-9
3) Siegrist, Christoph: Haller. Sammlung Metzler. Bd.57. Stuttgart (Metzler) 1967. S.5.

HALLER (seine Erhebung in den Adelsstand erfolgte 1749) wurde am 16. Okt. 1708 (Bloesch und Cuvier 8., Frey 17., Guthke 18. Okt.) in Bern geboren.

4) Hirzel, Ludwig (Hrsg.): Hallers Gedichte. Frauenfeld (J. Huber) 1882. Nachdruck 1917. S. 280.

Morgengedanken. 21. Mart. 1725. (S.279: HANDSCHRIFTEN. ... Z. ...) Vgl. Guthke „Andacht ...“ (2(1)1) S.329/S.344.

Er selbst datierte es in der dritten Auflage (1743) «21. Mart. 1725»./ In der 5.-10. Auflage (1751-1768) steht nur «1725», in der 11. (1777) «25. Merz 1725», was Hirzel übernimmt und polemisch für das richtigere Datum hält („Hallers Gedichte“ S.XXIVf., Anm.: So ist das Gedicht «Morgengedanken» entstanden, das Haller am 25. März 1725 geschrieben hat, / ein erhabener Lobgesang des Schöpfers, ...). Vgl. Fritz Meier „Beitrag zur Biographie A. Hallers“ Diss. München 1915, S.84, Anm. 53, der vermittelnd beide Daten für richtig hält (Konzeption, Vollendung). Liegt nicht eher in der 11. Auflage ein Druckfehler vor? Schon in der Handschrift Z (s. Hirzel „Hallers Gedichte“ S.279; Burgerbibliothek Bern, Mss. Haller 76, fol.4^v) ist das Gedicht «21 Mart. 1725» datiert.

Vgl. Frey, Adolf (Hrsg.): Deutsche National-Litteratur (=DNL) Bd.41. Haller/Salis-Seewis. Auswahl. Berlin/Stuttgart (Spemann) um 1885. Faksimile-Nachdruck. Tokyo (Sansyusya) 1974. Einleitung. S.X.

Unter dem Eindrucke der zurückkehrenden ernsteren Stimmungen ist wohl das schöne Gedicht „Morgengedanken“ entstanden (25. März 1725), ...

5) Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 4. Aufl. Vorbemerkung: Guthke „Andacht ...“ (2(1)1) S.329.

Dieses kleine Gedicht ist das älteste unter denen, die ich der Erhaltung noch einigermaßen würdig gefunden. Es ist auch die Frucht einer einzigen Stunde, und deswegen so unvollkommen, daß ich ein billiges Bedenken getragen, es beyzubehalten. Die Kenner werden dadurch, und in Betracht deß unreifen Alters deß Verfassers, es mit schonenden Augen ansehen.

Vgl. „Hallers Gedichte“ (2(1)4) S.3(2(2)10).

Vgl. „Deutsche Gedichte des 18. Jahrhunderts“ (2(1)1). S.402/403.

... der sechzehn und ein halbes Jahr noch nicht erreicht hatte.

Vgl. „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 1. Aufl. 1732 / 2. Aufl. 1734 / 3. Aufl. 1742 / 4. Aufl. 1748 / 5. Aufl. 1749 / 6. Aufl. 1751 / 7. Aufl. 1751 / 8. Aufl. 1753 / 9. Aufl. 1762 / 10. Aufl. 1768 / 11. Aufl. 1777.

6) Metzler-Haller. S.33-34.

7) Brockes, Barthold Heinrich (1680-1747) „Irdisches Vergnügen in Gott“ I. Teil. 1. Aufl. 1721 / 2. Aufl. 1724 / 3. Aufl. 1726 / 4. Aufl. 1728 / 5. Aufl. 1732 / 6. Aufl. 1737 / 7. Aufl. 1744.

II. Teil. 1. Aufl. 1727 / 2. Aufl. 1730 / 3. Aufl. 1734 / 4. Aufl. 1739 / 5. Aufl. 1767.

III. Teil. 1. Aufl. 1728 / 2. Aufl. 1730 / 3. Aufl. 1736 / 4. Aufl. 1747.

IV. Teil. 1. Aufl. 1732 / 2. Aufl. 1735 / 3. Aufl. 1745.

V. Teil. 1. Aufl. 1736 / 2. Aufl. 1740. °Auszug der vornehmsten Gedichte

VI. Teil. 1. Aufl. 1739 / 2. Aufl. 1740. aus dem Irdischen Vergnügen in

VII. Teil. 1. Aufl. 1743 / 2. Aufl. 1748. Gott. Hamburg (Herold) 1738.

VIII. Teil. 1746 IX. Teil. 1748. Hamburg.

I.-VI. Teil. Tübingen 1739/1753. VII. Teil. Tübingen 1746.

VIII. Teil/IX. Teil. Tübingen 1750.

8) Haller als Student in Tübingen 1723-25 und in Leyden 1725-27.

9) Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.16-20: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. (Kohlhammer) 1946-77/1985. Bd.2. S.202.

- Des weiten Himmel-Raums saphirene Gewölber
Sind Deiner Händen leichtes Spiel (10)
Das ungemessne All / begränzt nur durch sich selber
Kost Dich nichts als das Wort: Ich will. 40
- Doch dreymahl grosser GOTT! es sind erschaffne Seelen / III. (11)
Vor Deine Thaten viel zu klein;
Sie sind unendlich groß / und wer sie will erzählen /
Muß wie DU ohne Ende seyn.
- O ewigs Wesen-Quell! ich bleib in meinen Schranken / (12)45
Du Sonne blind'st mein schwaches Licht;
Und wem der Himmel selbst / sein Wesen hat zu danken /
Braucht eines Wurmes Lob-Spruch nicht.

2) Streicher, Andreas „Schillers Flucht von Stuttgart und Aufenthalt in Mannheim von 1782 bis 1785“ (1828:1782-83/1830:1783-85) Nach der ersten Ausgabe von 1836. Hrsg. v. Raabe, Paul. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1968. S.18-19. °Streicher(1761-1833)/Schiller(1759-1805).

Als der junge Schiller in die Klasse der Mediziner übertreten mußte, war er in seinem sechzehnten Jahre, und so ungern er auch die neue Wissenschaft ergriff, indem er nicht hoffen konnte, sich jemals recht innig mit ihr zu befreunden, so fand er sie doch nach kurzer Zeit um vieles anziehender, als er sich vorgestellt hatte; denn die verschiedenen Teile derselben, so trocken auch ihre Einleitung sein mochte, behandelten doch alle ohne Ausnahme die lebendige Natur und versprachen ihm einst bei dem Menschen neue Aufschlüsse über die Wechselwirkung des Körperlichen und des Geistigen aufeinander. Sein schon von Jugend auf sehr starker Hang zum Forschen, zum tiefen Nachdenken, wurde durch die Hoffnung angefeuert, hier einst Entdeckungen machen zu können, die seinen Vorgängern entschlüpft wären, oder daß es ihm vielleicht gelingen würde, die in so großer Menge zerstreuten Einzelheiten auf wenige allgemeine Resultate zurückzuführen. Aber bei allen diesen reizenden Vorahnungen und ungeachtet der vorgeschriebenen Ordnung, die auch sehr streng gehalten werden mußte, benutzte er doch jede freie Minute, um sich mit der Geschichte, der Dichtkunst oder den Schrifte zu beschäftigen, welche den Geist, (S. 18/S.19) das Gemüt oder den Witz anregen, und vermied solche, bei denen der kalte, überlegende Verstand ganz allein in Anspruch genommen wird. Unter den Dichtern war es Klopstock, der sein Gefühl, das noch immer am liebsten bei den ernstesten, erhabenen Gegenständen der Religion verweilte, am meisten befriedigte. Seinen eignen Genuß an diesen Werken suchte er auch seiner ältesten Schwester wenigstens in dem Maße zu verschaffen, als es durch briefliche Mitteilung in Erklärung der schönsten und schwersten Stellen möglich war. In seiner jugendlichen Unschuld, den hohen Stand noch gar nicht ahnend, zu dem ihn die Vorsehung erwählt und mit all ihren göttlichen Gaben so überschwänglich reich beteilt hatte, konnte er wohl öfters die entschiedene Neigung für dichterische oder andere Geisteswerke als eine bloße Belustigung für seine Phantasie betrachten und sich Vorwürfe darüber machen, wenn dadurch so manche Stunde seinem Berufsstudium entzogen wurde. Aber eine innere, beruhigende Stimme rief ihm dann zu: ist der große Arzt, der große Naturforscher Haller nicht auch zugleich ein großer Dichter? Wer besang die Wunder der Schöpfung schöner und herrlicher als Haller?

Du hast den Elefant aus Erden aufgetürmet,
Und seinen Knochenberg beseelt,
war ein Ausdruck, den Schiller nebst so vielen andern dieses Dichters nicht nur damals, sondern auch dann noch mit Bewunderung anführte, als seine erste Jugendzeit längst verfliegen war.

— HALLERS „VERSUCH SCHWEIZERISCHER GEDICHTE“ —
(2)

HALLERS „MORGEN-GEDANKEN“(1725)

(1) „WUNDER DER SCHÖPFUNG“

1)Haller, Albrecht(1708-77) „Morgen-Gedanken“(1725) 12 Strophen. 48 Verse: „Versuch Schweizerischer Gedichten“(1.Aufl.) Bern. Niclaus Emanuel Haller. 1732. S.28ff.: „Deutsche Barocklyrik. Gedichtinterpretation von Spee bis Haller“ Bern. Francke. 1973. S.327-347. Guthke, Karl S. „Andacht im künstlichen Paradies. Albrecht Hallers «Morgen-Gedanken» S.329(V.1-12)/S.330(V.13-48). Vgl. Reclam-Universal-Bibliothek. Nr.8422. „Deutsche Gedichte des 18. Jahrhunderts“(Hrsg.: Bohnen, Klaus) S.58(V.1-26)/S.59(V.27-48).

Morgen-Gedanken

- | | |
|---|-----------|
| Der Mond verbirget sich / der Nebeln grauer Schleyer
Dekt Luft und Erde nicht mehr zu;
Der Sternen Glanz verschwindt / der Sonne reges Feuer /
Stört alle Wesen aus der Ruh. | I. (1) |
| Der Himmel färbet sich mit Purpur und Saphiren /
Die frühe Morgen-Röhte lacht;
Und vor der Rosen Glanz / die ihre Stirne zieren
Entflieht das blasse Heer der Nacht. | (2) 5 |
| Durch's rothe Morgen-Thor der heitern Sternen-Bühne
Naht das verklärte Aug der Welt;
Der Wolken Schimmel glänzt von blizendem Rubine
Und glühend Gold bedeckt das Feld. | (3)
10 |
| Die Rose öffnet sich / und spiegelt an der Sonne
Des frühen Morgens Perlen-Thau;
Der Lilgen Ambra-Dampff belebt zu unsrer Wonne
Der zarten Blätter Atlas grau. | (4)
15 |
| Der wache Akers-Mann eilt in die rauhen Felder /
Und treibet den gewohnten Pflug;
Der Vögeln rege Schar erfüllet Lufft und Wälder /
Mit ihrer Stimm und frühem Flug. | (5)
20 |
| O Schöpffer! was ich sieh / sind Deiner Allmacht Werke /
Durch Dich belebt sich die Natur;
Der Sternen Lauff und Licht / der Sonne Glanz und Stärke /
Sind Deiner Hand Geschöpf und Spuhr. | II. (6) |
| Du zünd'st die Fakel an / die in der Sonne leuchtet /
Du giebst den Winden Flügel zu;
Du leyhst dem Mond den Thau / damit er uns befeuchtet /
Du theilst der Sternen Lauff und Ruh. | (7)25 |
| Du hast der Bergen Talg aus Thon und Staub gedrehet /
Der Grüfften Erzt aus Sand geschmelzt;
Du hast das Firmament an seinen Ort erhöhet /
Der Wolken Kleid darum gewelzt. | (8)
30 |
| Dem Fisch der Ströme bläbt / und mit dem Schwanze stürmet
Hast Du die Adern ausgehöhlt;
Du hast den Elefant aus Erden aufgethürmet /
Und seinen Knochen-Berg beseelt. | (9)
35 |

HALLER'S "MORNING-THOUGHTS" (1725)
 - The Dawn of the German Lyric of Thoughts (2) -

Katsumi TAKAHASHI

ABSTRACT

Among the German poems written around 1725, we can take Haller's "Morning-Thoughts" for the single that lately Schiller "quoted with admiration". Indeed Brockes' "Terrestrial Amusement in God" was then one of the best-selling books: its first part was published in the first edition 1721, in the second ed. 1724, in the third ed. 1726, in the 4th ed. 1728 and so forth. Why is it that the new generation of Enlightenment and Revolution keeps the "Terrestrial Amusement in God" at a distance? It is because Brockes "much too delivers himself to the boundless dexterity"(Haller's letter to Gemmingen, March 1772). What Schiller says about Voltaire, applies perhaps to Brockes: "only the poverty of heart" in "witty brains". They can not be up to our expectation of such a "song of soul" as Schiller's hymn "To the Joy"(1786) in Beethoven's Choral Symphony (1822-24).

What concerns the first part (ll. 1-20) of "Morning-Thoughts", there are some "vestiges of Lohenstein and Hofmannswaldau" from the late baroque period of the 17th century: "lilies' vapour of ambergris"(1.15) or "satin gray of tender lieves"(1.16). But in the second part (ll.21-40), "an inner Voice" rises and calls to the young Schiller: "Who sang the wonders of the Creation more beautifully and more magnificently than Haller?"

Thou hast heaped up the elephant from earth
 And animated its bony mountain.
 ("Morning-Thoughts" ll.35-36)

Here is the poetical climax, as the striking contrast of body and soul heightens to the pathetic tension. Much the same is the whale that "blows floods and storms with the tail"(1.33), for the "Creator"(1.21) has hollowed out its veins"(1.34).

In succession, the question is "the unmeasured universe"(1.39) which relates to Bruno's "infinite universe" ("De l'infinito, universo, et mundi" 1584), seeing that the "unmeasured time" corresponds to the "terrible ocean of the earnest eternity" (Haller "Unfinished Ode on the Eternity" 1736. 1.31/1.76):

The eternal silence of these infinite spaces terrifies me.
 (Pascal "Pensées" Brunschvicg-edition. nr.206)

Nevertheless, the universe for the young Haller remains to be "limited merely by itself" ("Morning-Thoughts" 1.39): it is still founded on the "crystal heaven" in conformity with the "Ptolemaic doctrine" that Haller considers "false" in the preface of the German translation of Buffon's "Natural History" 1761. Hence he replaces later the "unmeasured universe" with the "great City of Deity"(Civitas Dei) which is "wreathed merely by itself"(1.39). It is plain that the "wreathed" cosmos in Aristotle's sense refuses the "infinite universe".

In the third part of "Morning-Thoughts", the humble man in the figure of "a worm"(1.48) forms a contrast to the "triple great God"(1.41). The Absolute Being of the positive religion, who is here the unique ruler above all things, afterwards becomes a "holy barbarian" in the eyes of the aesthetic truth (Schiller "The Gods of Greece" 1788. 1.114). In comparison with the God, even "the supreme spirit"(1.188) can be at the best "nothing but the first of worms"(1.190). Schiller's "Gods of Greece" challenge the holy barbarian God: "As the gods were still more human, the mankind were more divine"(ll.191-2). Haller's "Attempt of Swiss poems"(1732-77) has not the least presentiment of any such new Evangel as Hölderlin's "blest Greece"("Bread and Wine" 1800-01. 1.55).

SOMMAIRE

On peut probablement tenir «Pensées du matin» pour un seul poème vers 1725 tel que Schiller «citait avec admiration» environ de cinquante ans après. À ce propos, Brockes était célèbre par son «Plaisir terrestre en Dieu» dans ce temps-là. Il en a publié par exemple la première partie à sa première édition 1721, à sa deuxième éd. 1724, à sa troisième éd. 1726, à sa quatrième éd. 1728 etc. Pourquoi donc ce «Plaisir» illustre ne pouvait plus intéresser la génération montante de Schiller à l'époque des Lumières et de la Révolution? Parce que Brockes «se livrait trop à l'insouciance infinie, avec laquelle les rimes venaient de sa plume»(Lettre de Haller à Gemmingen, mars 1772). Il en allait de Brockes peut-être comme de Voltaire pour la génération de Schiller. Elle leur trouve «seulement la pauvreté du cœur» dans la «tête d'esprit», sans atteindre au «Chant spirituel».

Quant à la première partie(vers 1-20) des «Pensées du matin», il lui reste quelques «bribes de Lohenstein et de Hofmannswaldau» qui viennent du post-baroque du XVII^e siècle: «la vapeur de l'ambre du lis»(vers 15) ou le «gris du satin des feuilles délicates»(vers 16). Mais la deuxième partie (vers 21-40) manifeste «une Voix intérieure» qui s'adresse au jeune Schiller: «Qui chantait des merveilles de la Création plus magnifiquement que Haller(1708-77)?»

Tu as amoncelé l'Éléphant de la terre,
Et animé sa montagne osseuse.
(«Pensées du matin» vers 35-36)

Voici le sommet du poème, car l'opposition exacerbée entre corps et âme s'élève au pathétisme tendu. Il en va de même de la baleine, qui «rejette l'eau par les événements / et s'élançe avec la queue»(vers 33), puisque le «Créateur»(vers 21) lui a «creusé les veines»(vers 34).

On passe de ces vers à «l'Univers immense»(vers 39) qui se rapporte à «l'Univers infini» de Bruno («De l'infinito, universo, et mondi» 1584). Car le «temps immense» correspond à la «mer terrible de l'Éternité»(Haller «Ode imparfaite sur l'Éternité» 1736. vers 31 / vers 76):

Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.
(Pascal «Pensées», numéro 206 de l'édition Brunschvicg)

Néanmoins, l'Univers reste «limité par lui-même seul»(vers 39) dans les «Pensées du matin» du jeune Haller: il repose encore sur le «Ciel cristallin» selon la «doctrine ptolémaïque» que le cinquantenaire appelle «fausse»(Haller «Préface de la traduction allemande de l'«Histoire naturelle» de Buffon» 1761). Il s'ensuit que le poète remplace l'«Univers immense» par la «grande Cité de la Divinité»(Civitas Dei) qui est «couronnée par elle-même seule»(vers 39). Le cosmos «couronné» au sens aristotélique refuse l'«Univers infini» une fois pour toutes.

Haller conclut ses «Pensées du matin» par le contraste entre le «grand Dieu»(vers 41) et l'homme qui se contente de l'humilité de sa position de «ver»(vers 48). Certes, voici le Dieu absolu de la religion positive sans pareil, qui domine tout, mais il sera regardé comme un «barbare sacré» dans le vers 114 des «Dieux de la Grèce»(1788) de Schiller, et à ses côtés, «l'esprit suprême»(vers 188) de l'homme n'est guère plus que le «Premier ver»(vers 190): «Lorsque les dieux étaient encore plus humains, les hommes étaient plus divins»(vers 191-192). On remarque ici que Schiller prêche l'Évangile nouveau d'une «Grèce bienheureuse»(Hölderlin «Le Pain et le vin» vers 55). Il n'y en a pas encore le moindre pressentiment chez Haller dans son «Essai des poèmes suisses»(1732-77).

HALLERS „MORGEN-GEDANKEN"(1725)

- Der Tagesanbruch der deutschen Gedankenlyrik (2) -

Katsumi TAKAHASHI

ZUSAMMENFASSUNG

Unter den um 1725 entstandenen deutschen Gedichten ist vielleicht Hallers „Morgen-Gedanken" das einzige, das Schiller später „mit Bewunderung anführte". Von den Zeitgenossen wurde allerdings Brockes „Irdisches Vergnügen in Gott" sicher mehr gelesen, dessen erster Teil, erschienen 1721, sieben Jahre später schon die vierte Auflage erlebte. Warum distanziert sich dann die folgende Generation der Aufklärungs- und Revolutionszeit von dem berühmten Werk? Brockes „überlies sich ... allzusehr der unendlichen Fertigkeit, mit welcher ihm die Reime aus der Feder giengen", erklärt Haller in einem Brief an Gemmingen vom März 1772. Bei Brockes findet die Generation Schillers offenbar ähnlich wie bei Voltaire „nur die Armuth des Herzens" in einem „witzigen Kopf", keinen „Seelengesang".

Auch der erste Teil (V.1-20) der „Morgen-Gedanken" enthält noch einige „Lohensteinische und Hofmannswaldauische Brocken" aus dem Spätbarock des vorangehenden Jahrhunderts, wie etwa „Der Lilgen Ambra-Dampff"(V.15) oder „Der zarten Blätter Atlas grau"(V.16). Im zweiten Teil (V.21-40) aber erhebt sich „eine innere Stimme", die den jungen Schiller zu dem Ausruf bewog: „Wer besang die Wunder der Schöpfung schöner und herrlicher als Haller?". Im Höhepunkt des Gedichts wird der scharfe Gegensatz von Leib und Seele in ein weitgespanntes Pathos überhöht:

Du hast den Elefant aus Erden aufgethürmet /
Und seinen Knochen-Berg beseelt.
(„Morgen-Gedanken" V.35-36)

Ähnliches wird versucht in dem Bild des Wals, „der Ströme bläbt / und mit dem Schwanz stürmet"(V.33), da der „Schöpffer"(V.21) ihm „die Adern ausgehöhlt"(V.34) hat.

Ferner greift der Dichter „das ungemessne All"(V.39) zum Thema auf, das sich mit Giordano Brunos „unendlichem Universum" in Beziehung setzen läßt. In einem anderen Gedicht von Haller entspricht nämlich die „ungemessne Zeit" dem „forchtbaren Meer der ernsten Ewigkeit"(„Unvollkommene Ode über die Ewigkeit" 1736. V.31/V.76). Es ergoht Haller ähnlich wie Pascal:

Die ewige Stille dieser unendlichen Räume erschreckt mich.
(„Pensees", Brunschvicg-Ausgabe 206)

Nichtsdestoweniger bleibt das Universum beim jungen Haller noch „durch sich selber bekränzt"(„Morgen-Gedanken" V.39): es beruht noch auf dem „krySTALLEN HimmEL" gemäß der „Ptolemäischen Einrichtung", die der Ältergewordene in der Vorrede zu seiner deutschen Übersetzung von „Buffons „Histoire naturelle" 1761 „falsch" nennt. Daher ersetzt er später das „ungemessne All" durch „der Gottheit große Stadt"(Civitas Dei), die „nur durch sich selber bekränzt"(V.39) ist. In einem „bekränzten" Kosmos im aristotelischen Sinne ist ein „unendliches Universum" nicht denkbar.

Im dritten Teil der „Morgen-Gedanken" steht der Mensch in der Gestalt „eines Wurmes"(V.48) demütig einem „dreymahl grossen GOTT"(V.41) gegenüber. Der absolute Gott einer monotheistischen Religion, der hier unabdingbar über alles herrscht, gilt Schiller dann freilich in seiner ästhetischen Erfahrung der „Götter Griechenlandes"(1788) als „heiliger Barbar"(V.114), neben dem „der höchste Geist / derer, welche Sterbliche gebahren / nur der Würmer Erster"(V.188-190) sein kann. „Da die Götter menschlicher noch waren, / waren Menschen göttlicher." - so erläutert Schiller direkt im Anschluß daran(V.191f.). Von solch einem Versuch zur Schaffung eines neuen Evangelium des „seeligen Griechenlandes" konnte Haller in seinem „Versuch Schweizerischer Gedichte"(1732-77) freilich noch nichts ahnen.

- * „VERNUNFT KANN, WIE DER MOND, ... " — Hallers „Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben" im Vergleich mit Popes „Versuch über den Menschen" : «RAISON PEUT, COMME LA LUNE, ... » — «Pensées sur la Raison, la Superstition et l'Irréligion» de Haller en comparaison d'«Un Essai sur l'Homme» de Pope : "REASON CAN, AS THE MOON, ... " — Haller's "Thoughts on Reason, Superstition and Irreligion" in comparison with Pope's "An Essay on Man"(1733-1734)
(Vortrag mit Materialien beim Herbstlichen Kongreß der Japanischen Gesellschaft für Germanistik am 14. Oktober 1989: Exposé présenté avec matériaux au congrès automnal de la Société Japonaise des Études Germaniques le 14 octobre 1989: Delivery with materials at the Autumn Congress of the Japanese Society for Germanic Studies on October 14th, 1989)
- (5) „ÜBER DEN URSPRUNG DES ÜBELS" : «SUR L'ORIGINE DU MAL» : "ON THE ORIGIN OF THE EVIL" (1734)
- * Hallers „Über den Ursprung des Übels" in Umrissen : Un survol du poème de Haller «Sur l'origine du mal» : Haller's "On the Origin of the Evil" in outline
(Vortrag mit Materialien beim 38. Kongreß des Zweigbezirks Chûgoku-Shikoku der Japanischen Gesellschaft für Germanistik am 5. November 1988 : Exposé présenté avec matériaux au XXXVIII^e congrès de la Section de Chûgoku-Shikoku de la Société Japonaise des Études Germaniques le 5 novembre 1988 : Delivery with Materials at the 38th Congress of the Chûgoku-Shikoku branch of the Japanese Society for Germanic Studies on November 5th, 1988)
- (6) „UNVOLLKOMMNE ODE ÜBER DIE EWIGKEIT" : «ODE IMPARFAITE SUR L'ÉTERNITÉ» : "UNFINISHED ODE ON THE ETERNITY" (1736)
- * „EIN ALLGEMEINES NICHTS ... WIE DER OCEAN" — Hallers „Unvollkommene Ode über die Ewigkeit"(1736) : «UN NÉANT UNIVERSEL ... COMME SI L'OcéAN» — L'«Ode imparfaite sur l'Éternité» de Haller en 1736 : "AN UNIVERSAL NOTHING ... AS THE OCEAN" — Haller's "Unfinished Ode on the Eternity"(1736)
- (1) „Gott" oder „Nichts" : «Dieu» ou «Néant» : "God" or "Nothing"
- (2) „Reich der Schatten" : «Royaume des Ombres» : "Shadowland"
- (3) „Widerherstellen der Seelen" : «Résurrection des Âmes» : "Resurrection of Souls"
- (7) SCHLUSS : CONCLUSION : CONCLUSION

QUELLENNACHWEIS : INFORMATION DES SOURCES : SOURCES
Zusammenfassung / Sommaire / Abstract
INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS

- 7) „Bald Brokes, bald Lohenstein" : «Tantôt Brockes, tantôt Lohenstein» : "Someteimes Brockes, sometimes Lohenstein"
- 8) „Lohensteinische und Hofmannswaldauische Brocken" : «Bribes de Lohenstein et de Hofmannswaldau» : "Scraps of Lohenstein and Hofmannswaldau"
- 9) „Gott" und der „Wurm" : «Dieu» et le «Ver» : "God" and the "Worm"
- (3) „DIE ALPEN" : «LES ALPES» : "THE ALPS" (1729)
- 1) „Ehrensäulen" : «Colonnes d'honneur» : "Pillars of honour"
- 2) „Die neue Art zu Dichten" : «La manière nouvelle de faire un poème» : "The new art of verse making"
- 3) „Der innere Mensch" : «L'homme intérieur» : "The inner man"
- 4) „Reichtum der Natur" : «Richesse de la Nature» : "Riches of Nature"
- 5) „Guldne Zeit" : «Âge d'or» : "Golden Age"
- 6) „Glückseliger Verlust" : «Perte heureuse» : "Happy loss"
- 7) „Welschlands Paradies" : «Paradis bourbonien» : "The Bourbon dynasty's Paradise"
- 8) „Der arbeitende Dichter" : «Le poète travaillant» : "The labouring poet"
- 9) „Die zehenzeilichten Strophen" : «Les strophes en dix lignes» : "The strophes of ten lines"
- 10) „Die Entwicklung der innern Vollkommenheiten" : «Le développement des perfections intérieures» : "The development of inner perfections"
- (4) „GEDANKEN ÜBER VERNUNFT, ABERGLAUBEN UND UNGLAUBEN" : «PENSÉES SUR LA RAISON, LA SUPERSTITION ET L'IRRÉLIGION» : "THOUGHTS ON REASON, SUPERSTITION AND IRRELIGION" (1729)
- 1) „Der erhabenste ... " : «Le plus sublime ... » : "The most sublime ... "
- 2) „Mittel-Ding" : «Entre-deux» : "Middle state"
- 3) „Maximen" und „Reflexionen" : «Maximes» et «Pensées» : "Maxims" and "Reflections"
- 4) „Vernunft kann, wie der Mond, ... " : «Raison peut, comme la lune, ... » : "Reason can, as the moon, ... "
- 5) „Ungeheure Seinskette" : «Vaste chaîne de l'être» : "Vast chain of being"
- 6) Griechentum als „Aberglaube" : Antiquité grecque captive de la «superstition» : Classic Hellenism as "superstition"
- 7) „Schlauer Aberglaube" : «Superstition rusée» : "Cunning superstition"

DER TAGESANBRUCH DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK (2)
- Hallers „Morgen-Gedanken“(1725) -

L'AUBE DE LA LYRIQUE D'IDÉES EN ALLEMAND (2)
- «Pensées du Matin» de Haller en 1725 -

THE DAWN OF THE GERMAN LYRIC OF THOUGHTS (2)
- Haller's "Morning-Thoughts"(1725) -

TAKAHASHI, Katsumi

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)
(Section de Philologie allemande de la Faculté des Lettres)
(Seminar for German Philology of the Faculty of Arts)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KÔCHI (Kôtzschi).
JAPAN 1989. VOL.38. GEISTESWISSENSCHAFTEN II.
BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI.
JAPON 1989. TOME XXXVIII. SCIENCES HUMAINES II.
RESEARCH REPORTS OF KÔCHI UNIVERSITY.
JAPAN 1989. VOL.38. HUMANITIES II.

INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS

- [I] DER TAGESANBRUCH DER DEUTSCHEN GEDANKENLYRIK :
L'AUBE DE LA LYRIQUE D'IDÉES EN ALLEMAND :
THE DAWN OF THE GERMAN LYRIC OF THOUGHTS
- (1) VORWORT : PRÉFACE : PREFACE (XXXVI. 43-54)
- (2) „MORGEN-GEDANKEN“ : «PENSÉES DU MATIN» : "MORNING-
THOUGHTS" (1725) (XXXVIII. II. 215-254)
- 1) „Die Wunder der Schöpfung“ : «Les Merveilles de la Créa-
tion» : "The Wonders of the Creation"
- 2) Der „Fisch der Ströme bläht“ und der „Elefant“ : Le
«Poisson rejetant l'eau par les évents» et l'«Éléphant» :
The "Fish blowing floods and storming with the tail"
- 3) „Das ungemessene All“ und „der Gottheit große Stadt“ :
«L'Univers immense» et la «grande Cité de la Divinité» :
"The unmeasured Universe" and the "great City of Deity"
- 4) „Das unendliche Universum“ und „der krystallene Himmel“ :
«L'Univers infini» et «le Ciel cristallin» : "The infinite
Universe" and "the crystal Heaven"
- 5) Das „allgemeine Nichts“ und das „heilsame Nichts“ : Le
«Néant universel» et le «Néant bienfaisant» : The "universal
Nothing" and the "salutary Nothing"
- 6) Die „unendliche Fertigkeit“ und „eine innere Stimme“ :
L'«Insouciance infinie» et «une Voix intérieure» : The
"boundless Dexterity" and "an inner Voice"